

第5章

ディスカッション活動・ 事後活動セッション



DG1



DG2



DG3



DG4



DG5



DG6



DG7



DG8



DG9

1 ディスカッション活動・事後活動セッションの概要

(1) 目的

ディスカッション活動は、(1) 各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めるとともに、(2) 率直かつ活発な意見交換を通じ、(2-a) 相互理解の促進、(2-b) 集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び (2-c) 人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

さらに、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業終了後の社会活動）を行う際に必要な具体的な知識やスキルを身に付けさせるとともに、参加青年（PY）に具体的な事後活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

(2) テーマ

本年度のディスカッション活動・事後活動セッションにおける共通テーマは「青年の社会活動への参加」とし、その下に9つのグループ・テーマを設けた。PYは、グループ・テーマごとに各国ほぼ同数のPYで構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

a. 共通テーマ「青年の社会活動への参加」

青年は、リーダーとして社会の活性化と発展に寄与することを期待されている。各参加国での青年の社会活動への参加の実情を理解し、様々な分野において青年が貢献し得る活動について討議することによって、青年自らが社会参加の重要性を再認識し、事後活動への意欲を高め、積極的な参加を促すことを目指す。

b. グループ・テーマ

- ① 防災と復興
- ② 多様性と社会的包摂
- ③ 教育
- ④ 雇用とディーセント・ワーク
- ⑤ 環境と持続可能性
- ⑥ 健康とウェルビーイング
- ⑦ 情報とメディア
- ⑧ ソフト・パワーと青年の外交
- ⑨ 青年の起業

(3) 実施方法

a. ディスカッション活動

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するDGを決定した。所属DGの決定後には、DGごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各グループ・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、ディスカッション活動への導入として、グループ・テーマに関連した課題別視察を実施し、日本の事例を学び、各テーマに対する知見を深めた。また、ファシリテーター一同が導入プログラムを実施し、担当するグループ・テーマに関連する自身のバックグラウンドを発表した。PYはファシリテーターのバックグラウンドの紹介から各グループ・テーマが議論されるべき理由を理解した。

船内活動では、各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、各DG及び各国で選出されたPY運営委員がファシリテーターを補佐した。

ベトナムにおける訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、グループ・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における「青年の社会活動への参加」についての認識を深めた。

DGごとに5回のセッションを行った後、PYが事業終了後に社会活動を行う際に必要な、具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取り組み方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。

その後、DGごとにファシリテーターとPY運営委員が進行役となり、ワークショップ形式により、具体的かつ実践的な事後活動の企画・立案の演習を行った。

ディスカッション活動運営委員会は、今年度の成果発表会を「DG Day」と名付け、交流しながら学びのある一日となるように企画した。午前の部では、各DGがセッションで議論した内容や学びをまとめ、プレゼンテーション方式で発表した。午後の部では、各DGがブースを出し、PYがスタンブラリーのように回る形式を用いた。PYは説明者のポスター・プレゼンテーションや展示を見て回るだけでなく、他のDGのPYに質問し議論する機会を得た。さらに、ディスカッション活動の成果として、「ディスカッション活動共同声明」を発表し、ディスカッション活動を通して学んだことをいかし、事業参加後に社会に還元することを誓った。PY運営委員は、各DG代表と交渉することで、国際会議と同様の合意プロセスを学んだ。

b. 事後活動セッション

事後活動セッションI（全体会）では、各国事後活動組織代表者が進行役となり、各国事後活動組織の連携体であるSSEAYPインターナショナルについて紹介するとともに、その目的・活動状況についての理解を深め、PYのSSEAYPインターナショナルや各国事後活動組織の活動への積極的な参加を促した。併せて、過去のPYが事業中に発案したプロジェクトの、その後の実施状況及び成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。また、各国における事後活動組織や過去のPYの活動状況や事例について理解を深めた。

事後活動セッションIIでは、国別にPYが事後活動として各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについて議論し、各国事後活動組織代表者のアドバイスを受けながらプロジェクト案の作成に取りかかった。

事後活動セッションIIIでは、ディスカッション活動を通して得た学びをいかした議論を行い、事後活動セッションIVでは他の国のPYへ向けて暫定版のプロジェクト計画を発表し、自国のプロジェクトを最終化するに向けて参考となるヒントを得た。そして、帰国報告会に向けた発表の準備を行った。

(4) ファシリテーター

ディスカッション・グループ	氏名	性別	国名
① 防災と復興		男	マレーシア
② 多様性と社会的包摂		女	日本
③ 教育		男	インドネシア
④ 雇用とディーセント・ワーク		男	フィリピン
⑤ 環境と持続可能性		女	フィリピン
⑥ 健康とウェルビーイング		女	インドネシア
⑦ 情報とメディア		女	タイ
⑧ ソフト・パワーと青年の外交		男	日本
⑨ 青年の起業		男	シンガポール

(5) 各国事後活動組織代表者

国名	氏名	性別	事業参加年
日本		女	2017
ベトナム		女	2011
シンガポール		男	1996
ミャンマー		男	2003
マレーシア		男	2005
ブルネイ		男	2011
カンボジア		女	2015
インドネシア		女	2011
ラオス		女	2014
フィリピン		女	1989
タイ		男	2012



各国事後活動組織代表者が福田正信内閣府青年国際交流担当室長を表敬訪問する（11月3日）

(6) プログラムの流れ

乗船前		PYの希望に基づき、所属グループを決定 PYは各国にて事前課題等の準備
↓		
日本国内活動	10月29日 19:45～21:00	グループ別ミーティング (ディスカッション活動運営委員の選出)
	10月30日	グループ・テーマに関連した課題別視察
	10月31日	ディスカッション活動(導入プログラム) (ディスカッション活動の趣旨・実施方法等の説明) 事後活動セッションI(全体会) (SSEAYPインターナショナル及び各国事後活動組織の活動事例紹介、 過去の参加青年がプログラム中に発案したプロジェクトの実施状況・成果の紹介)
	11月1日	事後活動セッションII(国別) (事後活動組織や既参加青年による活動の紹介)
↓		
船内 ディスカッション 活動	11月6日 10:00～12:45 11月8日 10:00～12:45 11月9日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションI グループ・ディスカッションII グループ・ディスカッションIII
↓		
ベトナム 訪問国活動	11月11日	グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
↓		
船内 ディスカッション 活動	11月15日 10:00～12:45 11月21日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションIV グループ・ディスカッションV
	11月27日 10:00～17:00	事後活動の企画・実践に向けての導入 事後活動の企画・実践に向けたワークショップ
	11月28日 10:00～12:45	まとめ
	12月4日 10:00～12:45	成果発表会の準備・DGごとのレポート作成
	12月5日 10:00～17:00	成果発表会
↓		
船内 事後活動 セッション	12月6日 10:00～12:45	事後活動セッションIII(国別) (各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについての議論及び プロジェクト案の作成、帰国報告会での発表準備)
	12月8日 10:00～12:45	事後活動セッションIV(国別) (プロジェクト案の作成、帰国報告会での発表準備)
	12月9日 10:00～12:45	ディスカッション活動(自己評価)
	12月12日 16:00～17:30	帰国報告会 (国別にプロジェクト案の発表)

2 ディスカッション活動・各グループのレポート

(1) 防災と復興グループ

PY：30名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

政治、社会、教育、その他の分野において、どのように青年が貢献し、防災と災害後の復興の効果を最大化させられるかを議論する。その上で、災害を取り巻く現在の状況について様々な視点から議論を行い、日本とASEAN各国に存在する課題や機会について認識する。

b. 期待される成果

本事業の終了時に、PYは以下を達成していることが期待される。

- ・ 防災と復興の活動を通じて、参加国における多様性の尊重と人間の尊厳を促進し、不寛容や差別、社会的排除を減らす。
- ・ 健康増進、病気の予防、そして防災について手薄なコミュニティにおける青年の活動を拡大する。
- ・ 「SSEAYP災害ネットワーク」を始め、地域や地域の青年活動についての持続可能な防災プラットフォームとすることで、自身の能力開発の効果を最大化する。

c. 身につく能力

知識

- ・ 災害時の多様性を尊重する人道的な対応がはらむ課題
- ・ 災害への対策時に指針となる人道的手順
- ・ 各参加国における災害マネジメントの政策の概要、現状の不足点、強みや弱み

スキル

- ・ 防災において青年参加及び能力開発の役割を理解する。
- ・ 青年間の文化横断的な協働をしながら専門能力を発揮する。

行動

- ・ ダイバーシティ・災害マネジメントの思いやりを持ち、受容する。
- ・ 複雑な人為活動において文化横断的に寛容となる。
- ・ 複雑な災害・緊急時の解決にあたり批判的思考をする。

B. 事前課題

個人課題

課題図書を読んだ上で、以下の6つの要素が青年参加を通じた防災施策に資する戦略や手法を考える。

- ・ 要素1：政治

- ・ 要素2：教育
- ・ 要素3：環境
- ・ 要素4：健康・医療
- ・ 要素5：水・衛生
- ・ 要素6：心理的支援

上記の戦略や手法は、PYが行ってきた活動でも、実行されていない考えでも構わない。必須条件は、防災における青年参加とその強化について組み込まれていることである。

国別課題

自国による既存の災害マネジメントの政策と手順を要約すること。要約レポートには国家の災害マネジメント手順が含まれているように。MSワードでA4 10ページ以内とし、以下について言及すること。

- ・ 国家の災害マネジメント手順。「マネジメント」は準備、対応、復興、減災を含む。
- ・ 上記についての利害関係者。

要約レポートに基づき、プレゼンテーションを用意すること。パワーポイントのスライドで5枚以内とする。発表時間は各国10分である。発表回の最後において、PYは各国における災害マネジメントの手順を理解していることが期待される。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設：三井不動産株式会社

活動

- クリーンエネルギーの発電所
- 議論

視察から学んだこと

- 防災におけるクリーンエネルギーと持続可能性の重要性
- 災害時のボランティアに求められるもの

グループ・ディスカッションI

ねらい

参加国における災害マネジメントの政策や手順を概観する。

活動

- 本題に入る前に、課題図書の復習として「仙台防災枠組」に関する動画の視聴。
- 各参加国における防災施策の現況、そして仙台防災

枠組を発展させることにより国際連合の持続可能な開発目標を達成する上での課題と機会について10分間の講義。

- c. 国別課題を用いて、情報リテラシーの向上と、双方向的な議論を行う。自国による既存の災害マネジメントに関する政策。
- d. 部屋前方に配置された模造紙に各自「類似点」「強み」「課題」を記入する。
- e. 参加国ごとに、自国による防災計画を発表する。
- f. 各自ポストイットで自国の「類似点」「強み」「課題」を整理して、議論を行う。
- g. 「類似点」「強み」「課題」と記入された模造紙ごとに、異なる色のポストイットを貼り付ける。

成果

3枚の模造紙に議論をまとめ、PYは各国における災害マネジメントの政策・手順、強みや課題についての学びを得た。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 被害者や救護者の心的外傷について理解する。
- b. 各参加国の防災における文化的・社会的多様性、人間の尊厳、寛容性、差別について知る。

活動

- a. 被害者の心的外傷について理解することがこの回の趣旨であるため、これまで災害を経験した者による共有を行う。
- b. 参加国ごとに、自国での主な災害について共有を行う。
- c. 各PYは救護者もしくは被害者の役を無作為に割り当てられる。地震と津波の被害についての動画を視聴し、その後各自3～5分間で救護者・被害者ともに意思決定の際に生来的に備わっている自らの「共感」に従った行動をするか、またはしないかを考える。
- d. 救護者役と被害者役でペアを組み、自分たちがどう感じたかを1分間で話し合う。それらをポストイットに書き、部屋前方に配置された模造紙に貼り付ける。
- e. ファシリテーターは模造紙上での類似点や相違点に着目し、各参加国において、いかに文化・社会的多様性、人間の尊厳、寛容性、差別が防災時に起こり得るかという議論に移る。
- f. 上記の議論を受けて、氷山の絵が描かれた別の模造紙の上に、さきほどのポストイットを見て課題や障害を再認識しながら、それらが氷山（水位より上）か水面下（隠れた事実）かを考えて、どちらかに配置する。

成果

最後に氷山の絵を用いたまとめをすることで、防災の面で日本とASEAN加盟国に存在する不足点につき、知識や発見を得ることができた。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

防災や復興支援の諸相において青年による行動や参加が担う役割について議論する。

活動

- a. 双方向的議論を行い、またプレゼンテーション・スキルをかん養する。ここでは個人課題を使用するが、それは課題図書を読んだ上で、以下6つの要素が青年参加を通じた防災施策に資する戦略や手法を考えるというものであった。
 - 要素1：政治
 - 要素2：教育
 - 要素3：環境
 - 要素4：健康・医療
 - 要素5：水・衛生
 - 要素6：心理的支援
- b. 各PYの発表を受け、ファシリテーターは要素ごとの戦略や手法についてまとめを行う。
- c. 部屋には6つの机が用意され、各机が各要素に対応している。机上にはPYの課題に基づいてファシリテーターが事前に要素について要約した内容が印刷され、配置される。
- d. 各PYは、課題を踏まえての自身の経験と興味に基づいて、どの要素の机に加わるかを選択する。
- e. 各PYは選択した要素についての戦略や手法の要約を読み込む。できれば、更に追加可能なものを（もしあれば）構想する。
- f. 事前になされた要約と、その後グループ・ディスカッション中に加えた考えに基づいて、要素ごとに、戦略的な事業・プロジェクト・計画を45分間で立案する。その後、他の要素に対して共有を行う。
- g. 例えば、要素3「防災を強化するための環境事業・プロジェクト・計画への青年参加」であれば、個人課題に基づいて事前に要約された戦略や手法に目を通し、この班による付加的なアイデアを45分間で話し合う。その後、要素3の班は前に出て、自分たちの内容について発表を行う。
- h. 要素ごとに分かれた班は45分間という準備や話し合いの時間を与えられ、その後ホワイトボードや模造紙、または口頭による発表に15分間が与えられる。

成果

このセッションでは、青年の行動や参加が防災や復興支援の諸相に寄与し影響を与え得ることにつき、各自様々な学びを得ることができた。

ベトナムにおける課題別視察

施設：ベトナム国家大学ホーチミン市校工科大学

活動

- a. グローバルな気候変動がベトナムに与える影響につ

いての講義

- b. PYと地元青年たちとのグループ・ディスカッション
- c. 成果発表
- d. ソーラーカフェの視察

視察から学んだこと

気候変動と災害の関連性と気候変動関係のプログラムに青年を巻き込むためのアイデア

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 異なる分野の専門能力が合わさることで、いかに防災プログラムが完成したものになるかにつき、明確なイメージを持たせる。
- b. 青年間の文化横断的な協働をしながら、専門能力を発揮する。

活動

- a. このセッションは課題図書に基づいて行われる。
- b. ファシリテーターは事例「ASEAN各国に影響を及ぼすと目される津波災害」というシナリオを用意し、読み上げる。
- c. PYは、前回の要素ごとの班に分かれる。
- d. 一つ目のシナリオは「津波に対する減災及び準備」である。青年にどのような役割が担えるかについて、各要素は5分間で提案を行う。
- e. 二つ目のシナリオは「津波への対応」である。青年にどのような役割が担えるかについて、各要素は5分間で提案を行う。
- f. 三つ目のシナリオは「津波からの復興」である。各要素は30分間で津波被害者用の仮設住宅の計画に取り組む。仮設住宅は、厚紙やカラーペーパーを用いてミニチュアのように作成する。この仮設住宅づくりには、意思決定、意見交換、6つの異なる要素による視点からの問題解決を通じて、各要素が貢献することが期待される。
- g. 最後には、復興の段階を通じて青年の行動や参加政治と共に、教育、環境、健康・医療、水・衛生、心理的支援といった面が持続可能な状態で考慮されたミニチュアの仮設住宅が完成する。

成果

このセッションの終わりには、異なる分野の専門能力が合わさることで、いかに防災プログラムが完成したものになるかにつき、明確なイメージを持たせることができ、また青年たちは文化横断的に協働しながら、専門能力を発揮することができた。

グループ・ディスカッションV

ねらい

日本やASEAN各国における青年の行動や参加、能力開発に焦点を当てたネットワーク・メカニズムを構築する。

活動

- a. 双方向的な議論を行い、情報リテラシーやプレゼンテーション・スキルを向上させる。グループ・ディスカッションIからIVにおいて蓄えられた知識やスキル、行動を用いて、各国のPYに「SSEAYP災害ネットワーク」を準備・発表してもらう。その土台としては、日本とASEAN各国における強みや弱み、現状の不足点、文化や専門に見られる違いを考慮した能力開発が必要となる。
- b. PYは、青年の行動や能力開発、帰国後に各PYが実行し持続することが可能なベストプラクティスを組み込んだネットワーク・メカニズムを設計・提案する。

成果

このセッションの終わりに、ネットワークを構築することができたが、その目的は、持続可能な防災のプラットフォームを始動させることにある。そこでは、参加者が自らの経験を伝えることで情熱や考えが共有され、各自が他者のストーリーにアクセスし、グローバルなキャリアを描いたり参加国における新しい取組のアイデアを得たりすることで利するものとなる。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

ねらい

全てのPYが全ての議論に加わり、自信と仲間への信頼を醸成する。

活動

- a. プロジェクトについての発表
- b. グループ・ディスカッション

成果

- a. 全員が聴衆の前で自信を持って舞台に立ち、話すことができた。
- b. 毎回の議論で支え合ってきたことで、PYの間に強いきずなが生まれた。

D. 決意・期待される今後の活動

DG1のためだけではなく、関連する全てのDGを含んだネットワークを構築し、協働や知識の共有、災害時の助けを得ることに資する。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

- a. 防災は、災害があった際にのみ注目するべきものではなく、あらゆる人々のためのものであることを学んだ。
- b. 災害に関する知識は、災害地域のみでなく人類全体が持つべきものである。
- c. 災害のない国に住む者は、被災者を助ける責任をより担っている。
- d. 気候変動は本当に起きていることであり、世界の誰しもが影響を受ける。行動を起こさなければ、誰も

救われない。

F. ファシリテーター所感

第46回SSEAYPのファシリテーターとして私を選んでいたことにつき、内閣府に対して感謝申し上げたい。同じく、私のディスカッション・セッションを全力で支援していただいた全ての管理部員の方々に御礼申し上げる。また、私の兄弟とも呼べるAndy、Kaya、Dimas、Jay、Koki、Malu、Fai、P'torへ。私に対しての指導や支援、そして親愛を、どうもありがとう。そして、エネルギーに溢れ、議論を盛り上げてくれた全てのPYに感謝している。私のグループで一緒にいられたことが率直にうれしい。

防災は、特にASEAN地域において注目を集める差し迫った問題であるため、DG1は実に挑戦的なトピックであった。日本の事例を教材に、選抜された青年たちと防災について学ぶことは、理解や未来の協働を生む上で実に良い手段であった。

私が本事業に参加するのは初めてであり、初心者であったが、教材の準備や設計、PYを指導し見守ることについての手引書があればなお良かった。また、もし訪問国での行動もDGごとであれば、他国の良い事例に対してPYがDGの議論で学んだ知識やスキルを応用することができたのではないだろうか。

本事業は、青年が知識や実践例を共有することが帰国後においても将来においても期待されるDGを基に、持続可能な青年のプラットフォームを立ち上げる、素晴らしい取組である。これにより、日本とASEAN加盟国を

通して、青年の持続可能なエンパワメントというメッセージが世界全体に対して、豊かな文化と調和と共に送られるのである。

さらに、ロールプレイやロールモデリング、もしくは他のDGとのグループ・セッションの余地が必要ではないだろうか。というのも、防災はその性質からして、健康科学、社会科学、生命科学など分野横断的なトピックで、防災の戦略立案に含まれるからだ。全てのDGが参加する共同セッションやワークショップを提案したい。そこでは「システム志向」のアプローチを採用し、青年たちに対し、青年が協働する際のシステムにおける構成要素がどのように互いに関係しているのか、異なるDGにおけるシステムは、それを包括するさらに大きなシステムの文脈の中でどのように機能するのかを学ばせたい。

例えば、DG1（防災と復興）とDG5（環境と持続可能性）の共同ワークショップやセッションであれば、持続可能な環境を作り上げることにより災害リスクを減少させるといったような問題解決のロールプレイを行って、青年たちの理解や協働を強められるであろう。

災害リスクを減じ、個人やコミュニティの長期的な対応能力や耐性を強化することはグローバルな課題であり、論を待たないと認識されている。防災を扱うこのDGを今後の本事業においても継続していただきたい。防災における青年のリーダーシップを醸成することは、参加国が持続可能で十分な耐性を持ち合わせたコミュニティ作りをしていく上で核心的な問題であるのだから。

(2) 多様性と社会的包摂グループ

PY：36名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

PYは、昨今のグローバル化により引き起こされた、日本及びASEAN加盟国における様々な社会的・経済的变化について理解することが求められる。また、社会的弱者を包摂し、各国の歴史や文化に基づく多様性を尊重する社会を築くために何をどうすれば良いか議論する。

b. 期待される成果

- 社会の周縁に追いやられている者や、弱者のための社会的な唱道を行えるようになる。
- 自国や外国に見られる多様性を認識できるようになる。
- 社会的な「弱さ」や「弱者」、その課題や解決策について理解する。
- 「社会的包摂」と「社会正義」について認識する。
- 民族や経済やその他のくくりによる各人口グループ

が直面する課題について理解し、受け入れ、共感する理解を深める。各グループが必要としている事柄に対処する方法を編み出せるようになる。

c. 身につく能力

知識

- 多文化主義や多様性という概念について理解する。
- 社会的包摂を理解し、宗教的少数派、障害者、LGBTQコミュニティ、精神疾患患者、その他が差別により受けている影響を理解する。

スキル

- 異文化コミュニケーション・スキルや判断力の基礎を理解する。
- アイデンティティの分析スキル
- ディスカッションのスキル
- プレゼンテーションのスキル

- ・ 調査のスキル
- ・ 批判的思考能力

行動

- ・ 自分の経験の範疇にない事柄に対峙した場合でも自らの殻を破り、他者の経験について理解することのできる能力をかん養する。
- ・ 自分とは異なる見解についても寛容になる。

B. 事前課題

個人課題 1

- ・ “See-up-stagram” エクササイズ
各PYは、自らの文化を代表する画像とハッシュタグを紹介する。

個人課題 2

- ・ 文化的価値観レンズ・ワークシート
自らの文化的価値観を表す語句をワークシートに記入する。

個人課題 3

- ・ 用語に関するエクササイズ
「多様性と社会的包摂」に関する用語の定義を行う。

個人課題 4

- ・ テーマに関係する、国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）に取り組むプロジェクトを一つ調査する。

国別課題 1

- ・ 自国の抱える問題や課題について調査し、プレゼンテーションを行う。
- ・ 社会的弱者が抱える課題や受けている影響、社会においてどう疎外されているかプレゼンテーションを行う。
- ・ 各参加国にてプレゼンテーション（約5分間）を準備するに当たり、パワーポイントを用いるのが望ましい。グループ・ディスカッションIIIにて発表する。

国別課題 2

- ・ 「提唱者になるまでの道のり」
 - 参加国ごとに、社会的弱者のために変化を起したり、提唱者となることについて話し合う。
 - PYは「社会的弱者にとって居場所のある社会にするために自身はどのような行動が起こせるか」という質問に答える。
 - 国別課題1に基づき、PYは社会的弱者についての認知を向上させ、彼らの立場を提唱し、意義のあるキャンペーンを企画する。
 - グループに、5分間のプレゼンテーションを行う。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設：株式会社ボードレス・ジャパン

活動

- 株式会社ボードレス・ジャパンの代表取締役副社長

から、同社の事業とミッションについてのプレゼンテーションをいただいた。

- UNROOFの代表取締役社長から、脊髄損傷を経て、今日の本事業を始めるまでの経緯についてお話をいただいた。同氏は現在、社会的に疎外された人々への就労支援に従事されている。
- ピープルポートのエンジニアから、日本における難民と、それに対する同社の支援についてプレゼンテーションをいただいた。

視察から学んだこと

- 日本におけるソーシャルビジネスの市場と、視察先企業がどのように事業機会を見出したか
- 日本で障害者が直面する困難
- 難民が日本社会への適応に向けて直面する課題
- 機会や提供されている社会的支援

グループ・ディスカッションI

ねらい

- パートI：アイスブレイキング及びチームビルディング
 - ・ 「私は誰か (Who am I)」シートを通じてディスカッションに対する期待や自身の目標を記入する。
- パートII-1：文化と価値観
 - ・ 「文化」という概念とアイデンティティにどう関連するかについて学ぶ。
- パートII-2：文化と価値観
 - ・ 自らのものの見方や価値観について学ぶ。
 - ・ 自分と異なる他者の視点について経験する。

活動

- パートI
 - ・ アイスブレイキング及びチームビルディング
 - ・ 「私は誰か」ワークシート
 - ・ 東京での課題別視察についての振り返り（ボードレス・ジャパン、UNROOF、ピープルポート）
 - ・ 課題別視察に関するディスカッション
- 基本ルール
 - ・ PYは基本ルールを共有した。
- パートII-1&2
 - ・ 文化と価値観
 - ・ 文化モデルと手法についての紹介（玉ねぎ型モデル及び冰山モデル）
 - ・ バリュー・レンズ・シートを見せ合った。

成果

- 自らのアイデンティティについて学んだ。
- 文化の複雑さを理解した。
- 異文化に対して心を留めて、尊重することを学んだ。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. パートI：コミュニケーション習慣に見られる多様性
 - ・ “See-up-land” 活動
 - ・ 異文化が混ざり合う状況下での感性を養う。
- b. パートII-1：用語に関する活動
 - ・ グループ・ディスカッションを通じて使用される用語について意見交換とディスカッションを行う。
- c. パートII-2：世界における社会的弱者という属性
 - ・ 世界中の事例を学ぶ。

活動

- a. パートI：コミュニケーション習慣に見られる多様性
 - ・ 自国に関する“See-up-land” アクティビティ及び用語
- b. パートII-2：世界における社会的弱者
 - ・ 世界中の事例を用いて、社会的に疎外されている弱者に対する見方を変え、偏見を減らし平等性を増したキャンペーンやプロジェクトのケーススタディ。

成果

- a. パートI：コミュニケーション習慣に見られる多様性
 - ・ 批判的に決めつけず、文化に順応することの重要性を学んだ。
 - ・ 非言語や言語ジェスチャーについて学んだ。
 - ・ PYの自身の経験について共有した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. パートI：ストーリーに基づく活動
 - ・ 「私のライフカーブ (My Life Curve)」というアクティビティから転機について学ぶ。
 - ・ 「コンフォート・ゾーン」と「ストレッチ・ゾーン」について議論する。
 - ・ SSEAYP参加に至るまでの道のりを振り返る。
- b. パートII：国別課題1
 - ・ 社会的包摂と共感について認識する。
 - ・ 日本とASEAN各国における差別、社会的疎外、そして社会的に疎外されている属性について学ぶ。

活動

- a. 「私のライフカーブ」に取り組み、共有した。
- b. 国別課題を発表し、自国の抱える課題について話した。

成果

- a. 「私のライフカーブ」を通じて、人生においてターニングポイントとなる大きな出来事について振り返った。
- b. 日本とASEAN各国に共通する問題について知った。

ベトナムにおける課題別視察

施設：ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学

活動

- a. 同学講師による授業
- b. 文化活動（手芸とポスター制作）
- c. PYと同学学生たちは、ナショナル・アイデンティティと、社会・文化に関する問題の解決策について議論した。

視察から学んだこと

- ・ 同学への視察についての振り返りを行った。
要点：
 - PYは「社会的包摂」という新しい考えに触れた。
 - PYは、同学の学生たちと考えや意見を交換した。
 - ベトナムにおける社会的弱者の属性について認識を新たにした。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. グループ・ディスカッションIIIパートIIの続き：文化と社会
 - ・ 国ごとの文化の諸相について学ぶ。
- b. パートI：SDGs
 - ・ 各々SDGsについて調べた内容について議論する。
 - ・ 地球市民として、本テーマに紐づく目標を達成するために何ができるか議論する。
- c. パートII：コンフリクト・レゾリューション（対立解決）におけるコミュニケーションスタイル
 - ・ 異なるコミュニケーションスタイルが、いかにコンフリクト・レゾリューションに利するもしくは障害となるか学ぶ。
 - ・ 多様性の環境下でコンフリクト・レゾリューションへの文化的能力を身につける。

活動

ベトナムでの課題別視察について振り返りを行った。

- a. パートI：SDGs
 - ・ ファシリテーターがSDGsと日本の取組についてディスカッションを行った。
 - ・ ファシリテーターは、SDGsの中心課題「誰一人取り残さない」について、また、国際連合前事務総長の潘基文氏からの引用について、紹介した。
 - ・ 「地球市民としてSDGsの17の目標を達成するためのあなたの行動」(“Your actions to reach SDGs 17 Goals as a Global Citizen”)
 - ・ ファシリテーターは、「持続可能な社会のためにナマケモノにでもできるアクション・ガイド」(“The Lazy Person’s Guide to Saving the World”)を紹介した。
 - ・ SDGsを達成するための行動について考え出した。
- b. パートII：紛争解決におけるコミュニケーションスタイル

- ・「異文化間スタイルモデル (The Intercultural Conflict Style Model (ICS))」をファシリテーターが紹介した。
- ・PYは、コンフリクト・レゾリューションの事例を分析した。

成果

- ベトナムについての理解を深め、ベトナムPYと意見交換を行った。
- 他国で行われているプロジェクトについて学んだ。
- 自分たちの調査プロジェクトが、SDGsのどの目標を対象にしているかを定義した。
- SDGsの17の目標を達成するための実践的な行動を考え出した。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- シンガポールでの活動について振り返る。
- PYが、得たスキルや知識について説明。
- 参加国ごとに「提唱者になるまでの道のり」のプレゼンテーションを行う。

活動

- シンガポールでの視察について振り返りを行った。
- 「提唱者になるまでの道のり」プレゼンテーション
- PYによるフィードバック

成果

- シンガポールでの視察について意見を交わし、シンガポールPYと議論を行った。
- DG2に関連したプロジェクトやキャンペーンを参加国ごとに考え出した。

D. 決意・期待される今後の活動

プレゼンテーションと展示はどのように受け止められたのか、NL、他のDGのPYやファシリテーターたちによるフィードバックを通して顧みた。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

ねらい

- DG Dayと事後活動セッションIVで、PYはDG2や他のDGから何を学んだのかを探る。
- 共同声明の草案についてフィードバックを与える。

活動

- 全体に向けた説明と展示について、それぞれ担当班による振り返り。
- PYは6つの班に分かれ、プレゼンテーション、事後活動、DG Day、共同声明の草案、について個別のフィードバックとレビューを行った。

成果

- PYは、DG Dayと事後活動セッションIVから貴重な教訓、そして更に伸ばせる部分を知ることができ

た。そして共同声明の草案についてのフィードバックを行った。

- ・ DG Dayについてのフィードバック
 - 全体に向けた説明：より双方向的で情報の多いものにできた。
 - 展示：小冊子（紙・オンライン）にして配布すればより見てもらえた。異なるブースの配置はもっとうまく管理できた。各ブースの時間配分、表彰について。

b. 共同声明の草案へのフィードバック

- ・ 題目：草案を、第46回SSEAYPのPYによる決意もしくはミッションステートメントに替えることができるか。
- ・ 引用する言葉の使い方

F. ファシリテーター所感

「多様性と社会的包摂」の一員として、PYはしばしば自らのコンフォート・ゾーンの外に出なければならなかった。

初めに、ファシリテーターとPYは、取扱いに注意する必要があったり、感情的なトピックについて共有したり議論したりするのに安全な場作りについて話し合った。スペースでは、決めつけをすることなく、互いの意見を尊重し、多くのPYは英語が母語でないということにも意識することも付随する。

意図的に大きく二つに分かれる構成とした。第一部は、異文化コミュニケーションで、文化についての認識を高め、異なる背景を持つ人々への理解や共感を持つことを企図したものだ。第二部は直接的に多様性と社会的包摂、そして世界中の社会問題に関わるものであった。

デリケートなトピックであったにもかかわらず、PYは問題を徹底的に詳細に調べ上げ、恐れをなさずに自国における社会的弱者に関する事実について発表した。対象には、高齢者、若い女性、地方で少数派とされる民族、LGBTQコミュニティに身を置く者、移民や難民を含んだ。

活動を通じて、PYは自国についてのみならず、他者のプレゼンテーションを通じて、自国以外の10か国についても学ぶことができた。プレゼンテーションには、価値観や優先順位に基づいて社会的包摂に対して異なる見方や理解が含まれていた。同時に、PYは、社会的弱者のために立ち上がる強さと決意を持つこと、そして支援の方法について考え出すことができた。

成果として、PYは自身の文化的価値について学ぶことができた。育ち方や社会経済的地位、自国におけるその他の要素によって、自らのアイデンティティが形成されていることが分かった。そして、日本とASEANにおける社会問題について学んだ。

終盤は、参加国ごとに「提唱者になるまでの道のり」

に自身を関係づけ、提唱者として、社会における弱者や周辺に追いやられた者のためにならんとする決意を共有する機会となった。

DG Dayでは、PYは全体に向けたプレゼンテーションを通じて、DG2にて得た新しい知識を共有した。物語形式のプレゼンテーションは、障害者や国際的な低賃金労働者、難民など社会的弱者の声を届け、艱難辛苦を描写する上で素晴らしい方法だった。同時に、展示においては、社会的に疎外されている属性に関するデータについての調査を発表した。これは、日本とASEAN各国の社会的に弱に属性が直面する困難や課題を明確に表していたため、大きな衝撃をもって受け止められていた。

PYからの、次のような感想を目にしてファシリテーター冥利に尽きる。

「(前略)他者の社会や文化について学ぶことで、彼ら彼女らの目線から物事を見ることができるようになった。文化、社会問題に対してより共感し、他者

の苦悩を理解できるようになった。」(DG2のPY)

「大した問題ではないと思っていた事柄が、他の人にとっては命を懸けるようなものであった。なので、決して他者の抱える問題を見下したり過小評価したりしてはいけない」(DG2のPY)

DG2のファシリテーターとして、このPYたちを誇りに思っやまない。セッションを通して、DG2を担当して良かったと思わせるような素晴らしい瞬間を何度も経験することができた。我々のセッションにおいてPYが互いについて学んでいくごとに、絆がどんどん強くなるのを自身の目で見ることができ、PYの知性の高さだけではなく、思いやりや親切であふれる心、そして美しいソウル(魂)が社会正義や平等の闘いに向かい強くなる姿を見守った。最後に、この第46回SSEAYPがPYの将来の学びやキャリアパスに、どう影響したのか知れることを、心待ちにしている。#ibelieveinyouths #foreverDG2

(3) 教育グループ

PY : 38名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマの概要

日本及びASEAN各国における教育の現状につき理解するとともに、全ての人々が包摂的かつ質の高い教育、そして生涯学習を享受するために青年はどのような貢献ができるかを議論する。

b. 期待される効果

- ・ 日本及びASEAN各国における教育の現状につき理解する
- ・ いかに教育が国力増進に寄与するか確たる考えをかん養する
- ・ 教育の質と効率を向上するためのプロジェクトを企画するための情報や戦略について身に着ける

c. 身につく能力

知識

- ・ 教育の持つ公的な価値、教育を通じた社会発展に関する提言についての政策レベルでの概略
- ・ 教育開発の戦略における変革理論(セオリー・オブ・チェンジ、例：教育機関は教育的成果を上げるための提案をどのように行い得るか)
- ・ 教育の質と効率を向上する上での有望な戦略に関する分析

スキル

- ・ コミュニケーション・スキル：言語及び非言語コミュニケーション、傾聴力、質問や建設的なフィードバックを行う能力

- ・ 他者への説得及び影響を与えるスキル：共感の仕方、関係性の構築及びチームのまとめ方
- ・ 問題解決や紛争解決のスキル：感情のマネジメント、他者理解及び多様性の活かし方についての理解

行動

- ・ 自己肯定：誇りと自信を持ち、品位、自尊心、尊厳のある行動をする
- ・ 他者への尊重：寛容さを鍛え、他者を思いやり、意見の不一致に対して平和的に解決する。
- ・ 環境への配慮：自然及び社会文化的環境へ感謝の念を持つ
- ・ 学びに対する敬意：過程を大事にし、知的及び創造的リスクを厭わない

B. 事前課題

個人課題1：教育機関のリスト

PYは、各自3つの教育機関について詳細情報を共有できるようにすること。機関の名前、属性、理念や目的、利害関係者、領域、資金の出所を含むこと。

- ・ 当該リストはグループ・ディスカッションIIにおいて、いかに教育機関が社会からの需要に応じているか、教育機関が提供する公的な価値の測定について理解する際に使用される。
- ・ また、グループ・ディスカッションIIIでも、教育機関による変革理論における前提を理解・構築する際にも使用される。

個人課題2：評価についての事例研究

各自で、任意の教育機関について調査を行う。要点は次のとおり。

- (1) 当該組織の背景情報
 - (2) 教育の質及び効率性を向上する上での当該組織による活動内容
 - (3) 活動の成果
- ・ 調査結果はグループ・ディスカッションIVにて、評価をどのように行うか、いかに異なる要素が合わさって効果をもたらしたのかを理解する上で特に有用な事例を整理する際に使用される。

国別課題：自国における教育の現状

参加国ごとに、自国における教育の現状についてプレゼンテーションを用意すること。

- ・ このプレゼンテーションは、グループ・ディスカッションIで各国における教育の現状を詳説する際に使用される。

参考文献1：パブリック・バリュー・プロポジション

- ・ マーク・H・ムーア『公共価値の創造（Public Value: A Quick Overview of a Complex Idea）』
- ・ ニュージールランド首脳陣によるマーク・ムーア教授への諮問会

参考文献2：変革理論

- ・ ラーニング・フォー・サステナビリティというブログにおける変革理論の紹介。多くのリンク先がある。
- ・ センター・フォー・セオリー・オブ・チェンジ

参考文献3：評価

- ・ カナディアン・エバリュエーション・ソサエティ「評価とは何か」
- ・ マイケル・クイン・パットン『実用重視型評価（Utilization-Focused Evaluation）』（1978年に開発された、特定の用途とユーザーごとの評価）

C. 活動内容**日本における課題別視察**

施設：品川女子学院

活動

- a. 同校の教員によるプレゼンテーションが行われた。同校の歴史、教育理念、ビジョンやミッション、活動領域及び資金の出所について説明がなされた。
- b. 校内視察が行われた。学校生活がどのように営まれているかを直接体験する一助となり、当校の近代的な施設を見学した。
- c. 生徒との交流。昼食をとりながらの形式ばらない議論や、講堂での双方向な議論の場を設けていただいた。
- d. 教員の皆さんとの交流。教員の教育手法、戦略や課題について議論する機会となった。

視察から学んだこと

- a. PYは同校の歴史、教育理念、ビジョンやミッション、関係者、活動領域、資金の出所について学んだ。
- b. 同校の独特なプログラムである企業との連携や、起業家プログラム、ソーシャル・プログラム、日本文化の授業について学んだ。
- c. 当校の「28プロジェクト」について学んだ。時代に即した校是の見直しを行い、卒業生が28歳を迎えるまでに社会に大きな貢献を残せるようにするというものであった。
- d. 同校の公共価値提案（パブリック・バリュー・プロポジション）について、また、どのように変革理論を適用しているかを学んだ。

グループ・ディスカッションI：入門編：教育と、国の発展におけるその役割**ねらい**

- a. 日本及びASEAN各国における教育の現状を理解する。
- b. （日本及びASEAN各国における）地場で行われる実践で見られる教育的課題を検証する。

活動

- a. 各国が自国における教育の現状について共有した。
- b. 各国における教育の現状につき、類似点・相違点を認識し、議論した。
- c. 理想の社会や、その実現のために教育はどう貢献できるかを議論した。（例：効果的な学校運営や教室内での実践の質について）

成果

教育とは、国家がその国民や未来に対してなし得る投資の中で最も重要なものの一つであると、全てのPYが合意した。雇用、健康、政治過程への参加といった面をはじめ人生におけるより良い機会を手にすることができるよう、全ての子供に対して質の高い教育を受ける権利が与えられるべきである。

また、PYは、教育機関が幅広く多様な学習環境と空間を提供しているという理解を深めた。しかし、問題も存在しており、最たるものは、なされる教育の水準が低いことである。そして、質の高い教育に対する生徒の需要を教育機関が満たせるように当局はしなければならない、とPYは認識するに至った。

PYは、直近数年間での急激な改善にもかかわらず、何百万人という子供たちが教育への門を閉ざされたままであることを知った。特に、女子に対しては大半の場所において大きな壁が立ちふさがったままである。全ての生徒が、責任ある国民となるべく、心配することなく教育を受け続けられる、望ましい環境を与えられるように、社会を構成するあらゆる面々が責任を負っている、とPYは考えた。

グループ・ディスカッションII：教育の持つ公的な価値についての概説

ねらい

- 教育における公共価値提案という考え、その機能の仕方、またいかにそれを発展させられるかについて理解する。
- 公益のために個人や教育機関がいかに貢献できるかについて理解する。

活動

- 公共価値という概念やその歴史についてのファシリテーターによる紹介
 - 「コモンズの悲劇」についての動画視聴
 - 『公共価値の創造』の著書であるマーク・ムーアについての動画視聴。
 - マーク・ムーアの有名な「戦略的なトライアングル (Strategic Triangle)」についての紹介
- PYによる教育機関についての情報共有。これには、機関の名称、類型、ビジョンやミッション、利害関係者、活動領域、資金の出所を含む。
- 教育機関のリストに目を通し、それらの公共価値提案についての考察。
- 公共価値ごとに小さな班に分かれての議論。

成果

PYは、公共価値という概念は、権力者にとっての実践的な指針となると理解した。あらゆる任意の政策、施策、機関等を対象に、どのような「価値」が付加されるかが問われ、それは単なる金銭的な勘定を超えたものである。

教育機関というのは、非常に重要な存在であるとPYは学んだ。教育機関は、我々に社会の目標達成のための手段を供給し得るのである。こうした目標や価値というのは、我々の社会に普及する教育制度にその定義を左右される。また、PYは、社会の指導者たちが社会問題の解決をしようと尽力する多種多様な特定の状況下において、大半の教育機関が位置づけられていると学んだ。

グループ・ディスカッションIII：教育開発戦略における変革理論

ねらい

- 変革理論について理解するために、いかにしてまたどうして、望ましい変化が特定の文脈下で起こり得るのか、全体像をつかむ。
- 様々な教育機関に対しての変革理論の適用について理解する。
- 各自で変革理論を書いてみる。

活動

- 変革理論とは、長期目標の達成に向けて辿る一連の仮定（理論）及び、各仮定における結果とプログラム活動の関連を描写したものであると、ファシリ

テーターが説明した。

- PYは、教育機関の変革理論について精査した。
- ファシリテーターにより、PYには各自の変革理論を構築するのに役立つツールやテンプレートが与えられた。
- 挙がった問題点ごとに分類された班別で議論を行った。各自が自分の変革理論を書いた。
- ジグソー法により、PYは自らの変革理論をまとめて、説明した。

成果

変革理論とは、望ましい変化とその変化を引き起こすであろう行動との間の関係性についてなされる予測に基づいた仮定である、とPYは教わった。「Xを行えば、Yが起こると予測され、それにより」という話である。

変革理論のモデルを使うことで、より即したプログラムを開発することに資するような、組織及び個人の学習と、適応性のある管理を推進することに繋がる、とPYは学んだ。

また、変革理論をその他の組織に関するツールと組み合わせ、組織の一貫性、効率、そして何より効果を向上させられるようになった。

ベトナムにおける課題別視察

施設：ホーチミン市師範大学

活動

- 国際協力室の副室長による紹介プレゼンテーションがなされた。このプレゼンテーションでは、同学の歴史、組織体制、教授陣、学部や部門、理念、機能や目的について詳説された。
- 同学の教授や学生たちとの間でSTEM教育を題目とした議論のセッションが設けられた。ベトナムが自国の教育制度を通じて自らの国際競争力を向上するため重要な手段としてSTEM教育が採用されている。

視察から学んだこと

- PYは、同学についてはもちろんのこと、高度な養成課程と高水準の講師陣により、教師の質とそのプロフェッショナルなスキルを向上させ、同国が抱える社会経済的そして文化的な問題を解決することに同学が担う役割について学んだ。
- PYは、STEM教育が創造性、協調性、批判的思考、コミュニケーションなど、21世紀型の必須な学習スキルを伸ばす上で役立つことを学んだ。そのカリキュラムとは、参加型で、生徒が現実世界の問題を通じて考える気が起きようになっている。

グループ・ディスカッションIV：教育の戦略について評価する

ねらい

- 評価の際の基準や指針について理解する。

- b. 評価を行う際に有用な、論理モデルや評価のツールについて知る。
- c. 評価の設計をしてみる、もしくは教育の戦略について評価を行ってみる。
- d. 理論は機能しているか。どういう理由で機能しているもしくはしていないのか。

活動

- a. PYが次回同じ過程をたどる際により上手くできるよう、ファシリテーターは鍵となる評価手法について考察を加えた。
- b. 各自の評価作業に役立つよう、ファシリテーターから論理モデルとテンプレートのサンプルが提供された。
- c. 議論及び実演
 - ・ PYは、ファシリテーター及び自分たちの中から提示された評価事例について分析を行った。
 - ・ 目的の達成に成功した教育機関や個人としてどのような者がいるか、具体的に名前を挙げた。

成果

評価とは、あるプログラムを批判的に検証する過程であり、その目的とは、プログラムの成否を判断し、その効果を向上させ、もしくはプログラムの決定を伝えることであると、PYは学習した。

また、教育機関においては、評価とは、教育プログラムの活動内容、特徴や成果について情報の収集・分析を考慮しなければいけないということに気が付いた。

そして、あるプログラムが何をするかと、そのプログラムによってどういう変化が起こり得るかという両者の関係性や仮定の全体像をつかむことで、論理モデルが評価に役立つということを理解した。論理モデルは特に、プログラムの中身と、その前提事項や期待される成果との間に存在する差異を顕在化する上で価値がある。

グループ・ディスカッションV：教育の戦略ごとに行う 班別議論

ねらい

- a. 日本及びASEAN各国における教育を向上させる組織・個人的な教育の戦略を作り上げる。
- b. 班分けの基準:
 - ・ 段階：早期教育、幼児教育、小学校教育、中学校教育、高等教育、職業教育
 - ・ 手続き：科目専門教育、共生教育、非公式教育
 - ・ 属性：女子教育、特別支援教育、学校外教育、難民教育

活動

選ばれたテーマごとの戦略に基づいて班別で議論を行い、各班は公共価値提案、変革理論を策定し、自らの戦略を評価することが求められた。

成果

PYは6つの班に分かれた。それらは、早期教育、学

校外教育、特別支援・共生教育、女子教育、STEM教育及び高等教育である。

各班ともに、公共価値提案、変革理論を作り、最終的に目的達成に向けた評価を行った。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション ねらい

- a. 周到的計画、構成及び演習により、プレゼンテーションを効果的なものにできるようにする。
- b. 明瞭で印象に残るような、効果的なプレゼンテーションに必要なスキルを獲得し、実行する。

活動

- a. PYは5つの班に分かれてアイデアを練り、プレゼンテーションに備えた。
- b. 各班の広い分野から成る意見を持ち寄り、共通するアイデアや議論を見出し、発表した。

成果

PYは迫真のプレゼンテーションを作り上げた。早期教育、学校外教育、特別支援・共生教育、女子教育、STEM教育、そして高等教育について強調したものであった。

D. 決意・期待される今後の活動

ディスカッション・セッションを終えて、PYは多種多様なスキルや、真の学びを得て、経験を共にして成長した。このようにして、PYには各自の唱道を行える能力が備わった。

DG3のPYは、教育的な課題や革新についての話し合いを促進するべく、オンラインでの協働を約束している。それにより、教育に価値を置き、個人が教育制度を改善させていくような文化の醸成に対する我々の努力は信用あるものとなる。

フェイスブックやインスタグラムといったSNSは、アドボカシーの基盤として、また交流・ネットワーキング・マーケティングの媒体として用いられるだろう。本プロジェクトが見据える長期的な効果は、この基盤が第47回SSEAYPに手渡され、教育についての次なるプロジェクトもが実行されるようになることである。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

自己評価セッションの主目的の一つは、PYが達成したことに目を向け、またディスカッション・セッションでのマイルストーンを回収させることである。そして、自己評価セッションは、PYとファシリテーターの至らなかつた時を振り返って批判的に評価する機会でもあった。

DG3のPYは、教育関係の仕事に従事していたり、教育学を学ぶ学生だったり、教育という分野に深く関心を寄せる者によって構成されていた。PYは、我々の教育業界を変える物事や考えにより奮起し、全ての者のため

の生涯教育の持つ障壁あるいは可能性に引き込まれた。しかし同時に、そこから挙がる教育的な課題について議論し解決策を見出すには、5回のセッションでは十分ではないとも感じたのであった。

このDGが、アイデアや問題を整理したり、情報を分析したり、異なる観点から結論を導いたりするためのプラットフォーム以上の存在になったとは多くのPYの弁である。「ホーム」のような居場所となり、真の友情を深める場所となったのである。

F. ファシリテーター所感

ディスカッション・ファシリテーターを務めることは非常に光栄で名誉なことである。信頼と機会を頂戴したことについて、日本政府内閣府に対し感謝申し上げたい。また、SSEAYPインターナショナル・インドネシアに対しても、たゆまぬ支援と価値ある推薦について御礼申し上げる。さらに、クリストファー・ジョンストーン博士に対しては、本年度のディスカッションに欠かせなかった「教育の3本柱」である公共価値、変革理論、評価戦略について講義と実りある議論をいただき、頭が上らない。

教育とは、様々な専門領域に関係した幅広い分野である。それゆえ、本事業の限られたセッション枠内で全ての領域を検証することは難しかった。本年度の教育に関するディスカッションの主目的は、全ての者が共生的で質の高い生涯教育を受けられるようにするために青年が貢献する上で必要なスキル、知識、姿勢を提供することであった。

そこで、我々のディスカッションは、既存の教育の改善に焦点を当てた。その方法とは、公共価値提案を理解

して真因や問題を分析し、変革理論を用いて諸問題間の溝埋めを行い、評価のスキルをもって戦略を継続的に評価していくことであった。というのも、これらは教育機関の目的や方向性を決定づける際に鍵となる要素だからである。

提示された概念は難解で複雑だったため、多くのPYのために、ファシリテーターは全セッションを通して、調整を施さなければならなかった。主体的な学びを期待することが難しいこともあったため、計画どおりに進んだセッションもあれば、そうでないものもあった。しかしながら、私はファシリテーターとして、心からの感謝の念をDG3の全員に伝えたい。皆はディスカッションに対して、誠に真摯に努力してくれた。

PYは、ディスカッション・セッションを通じて、私にかけがえのないことを教えてくれたのでここで共有したい。私が彼らに何を知ってほしく、何を行ってほしく、そしてどのような人物になってほしいかについて、より明確に考える上での手助けとなった。私は、彼らに情熱を持った教育者になってもらいたいのだ。そしてPYは、私が教育を受ける中では得られなかった全てを与えてくれた。意志の力、モチベーション、発想力である。PYは、私をより良いファシリテーター、教育者、そして人間にしてくれた。

最後に、仲間のファシリテーターであるDino、Kaya、Jay、Malou、Fai、P' Tor、KokiそしてAndyに謝辞を送りたい。類いまれな面々と仕事を一緒にすることができて誇りに思う。心から私のことを気遣い、支えてくれて、また私の家族となってくれて、また、あなた自身の素晴らしさを教えてくれて、どうもありがとう。

(4) 雇用とディーセント・ワークグループ

PY：32名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

日本やASEAN加盟国における青年の雇用や課題の現状について理解する。その上で、各参加国の歴史や文化を踏まえたディーセント・ワーク（働きがいのある仕事）の達成、また仕事や雇用の持続可能な在り方を促進することに対して、青年がどのように貢献できるか議論する。

b. 期待される効果

- 日本及び東南アジアの各国における労働力の現況、課題、状態、について理解し、労働市場の今後についてプレゼンテーションする。
- 議論への参加を通じて青年のネットワークを強化す

る各種活動において協働し、日本及びASEAN加盟国の連帯意識を強める社会貢献活動を企画できるようになる。

- 国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）において、全ての人々のための経済成長とディーセント・ワークをうたう目標8について深い議論ができるようになる。

c. 身につく能力

知識

- 各参加国における様々な労働市場の指標について理解し、労働環境のもたらす影響について分析できるようになる。
- 職場において労働者に影響する様々な労働問題につ

いて知る。

- 各労働市場の強み、弱み、機会、脅威について理解することができるようになる。
- 日本及び東南アジアにおける労働力の状態や求められるスキルについて知る。

スキル

- 今日の市場に見られる労働環境や機会についてどう感じるか、自身の効果的なコミュニケーションを通じて忌憚なく表明することができるようになる。

行動

- 各参加国の労働力や労働関係に影響する様々な概念について自由に共有し、グループにおいて、個人に及ぼす感情を話し合えるようになる。

B. 事前課題

個人課題

PYは、社会正義の定義と、人々は社会正義が平等にもたらされている世界にいると思うか質問された。労働組合もまた、課題の中に組み込まれているトピックである。このような労働者組織の長所や欠点、労働組合の目的、労働者の権利、安全基準、平等な給与を促進する方法について質問された。

国別課題

PYは、国際労働機関の報告書「ILOアジア太平洋社会の見通し」を参照しながら、自国の労働関連指標に基づいて、パワーポイントによるプレゼンテーションを作成した。プレゼンテーションは、GDPや就業率（男女別）、全体の失業率と若者の失業率（最新である2015～2017年のデータ）に関する統計に基づいている。

各参加国はまた、職場環境にまつわる様々な社会問題について議論するための副題を割り当てられた。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設：株式会社ディーセントワーク

活動

- 高橋秀成代表取締役による講義
- 「ディーセント・ワークとは何か、どのように達成するか」という質問についての議論

視察から学んだこと

- 日本における課題別視察では、高橋代表取締役から日本での採用過程や採用経験についてお話を伺うことができた。同氏は知識豊富でこの分野の専門家であり、適切な採用候補者を日本企業に繋げ、適切な従業員を採用することの一端をご説明いただいた。
- 同氏は様々な企業の状況についてケーススタディを紹介し、PYに対して企業文化の違いに関する質問を投げかけた。これによりPYは、組織における異なる文化についての知見を得ることができた。どの企

業も異なる状況下であり、それらを見ながらPYは、将来携わることになるかもしれない職場環境について、どのようなものがあるかを知ることができた。

グループ・ディスカッションI

ねらい

PY同士、互いについて知り、仲間意識を醸成する。

活動

- 労働の歴史及びSDGsについての動画プレゼンテーションを視聴。特にディーセント・ワークと経済成長についての目標8に焦点が置かれたものである。
- 各参加国の労働市場における指標についてのプレゼンテーション。

成果

労働の歴史を扱うことで議論が始まった。どうしてディーセント・ワークと雇用について話し合う必要があるのか、そしてなぜSDGsの一部として強調されているのかについて意見が共有された。PYたちは、労働者の権利を守り、スキルを伸ばし、全ての人々にとってのディーセント・ワークを達成することの重要性について自らの考えを紹介し合い、働くことは家族のためになり、その生活を向上させることであると考えていた。

また、各参加国の労働市場における指標について議論が行われた。

グループ・ディスカッションII

ねらい

労働市場の主な強み、弱み、機会、脅威について特定し、自らの考えをグループにおいて共有できるようになる。

活動

国別に労働市場に影響する強み、弱み、機会、脅威についてのプレゼンテーション（SWOT分析）

成果

PYは、日本と東南アジアの労働市場における強み、弱み、機会、脅威とは何か、小さな班に分かれて話し合った。要点は次のとおりである。(1) ほとんどの労働市場はミレニアル世代によって構成されている。この層は力強く、積極的で、キャリアを軸にもの考える若者だ。(2) 情報技術、コンピュータ・サイエンス、エンジニアリングなどを修めた者の伸びているスキルが労働市場においては求められる新興経済が台頭している。(3) 海外の相手とコミュニケーションをとるために付加的なスキルとして、英語、中国語、日本語などの言語を若い労働者は学んでいる。

また、コスト効率の良い人材を求めて、欧米や日本から東南アジア地域には旺盛な投資がなされているなど、同地域には非常に多くの機会がみられる。

また同時に、労働市場にまつわる弱みや脅威も存在する。労働コストについて中国を相手にした競争が若い新

興市場の経済を損なっていることが挙げられる。そして学卒者、熟練労働者、終身雇用の従業員の間には存在するスキルの格差は非常に大きい。テクノロジーに適応するスキルが、労働市場においてもっとも欠如したものだとして指摘された。他に指摘された脅威として、自然災害、機械化やデジタル化、政情不安が議論の中で挙がった。

グループ・ディスカッションII

ねらい

地域の職を守り、安定したものにする既存の法律や規制の効果について共有できるようになる。

活動

- 雇用やディーセント・ワークに関する政府の戦略と行動についての、国別プレゼンテーション
- 労働時間、ワークライフバランス、安定した仕事、特に女性に対しての雇用における機会や取扱いの均等性について、班に分かれての議論。

成果

政府は、労働関連の問題について指針や基準を策定する最重要の利害関係者であると指摘された。PYは、多くの政策について紹介し合った。それらは、労働の諸問題に解決策をもたらすためのもので、従業員の安全、平等な報酬や労働者の権利や福祉を向上させるため、絶えず新しい政策が作られている。

ベトナムにおける課題別視察

施設：青年雇用サービスセンター（YESセンター）

活動

- 同社CEOによる講義
- 地元青年たちとの班に分かれての議論

視察から学んだこと

- 企業の採用ニーズに応えるべくベトナムのいくつかの都市においてジョブフェアを主催する同社が提供する様々なサービス内容について学んだ。
- 同社との議論は実りあるもので、地元青年たちとの交流も促された。同地域におけるディーセント・ワークを達成するにあたっての懸念についても話し合うことができた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

社会正義と労働組合の定義について説明できるようになる。

活動

- PYは、自分たちにとっての社会正義の定義は何か、今日において達成し得るのかについて議論することができた。また、各参加国において正義が果たされなかった具体的な事例が紹介された。
- 労働組合とは何か、またその長所や短所は何か、今

日の労働組合はどう関係しているのかについて議論がなされた。

成果

PYは、社会正義の達成には程遠い世の中であると述べた。というのも、単純に職場における人権侵害差別が存在するからである。特に、女性、HIV感染者、障害者、LGBTQ+の従業員に対してのものだ。多くの国において、労働者の権利とその保護は、いまだ途上にある。こうした社会問題は、国の主要な課題として政府機関によって取り組まれるのが待たれる。

グループ・ディスカッションV

ねらい

未来の仕事の在り方についての理解。未来の仕事におけるデジタル化についての意見交換。

活動

テクノロジーが今日の労働市場に与える脅威について班に分かれての議論

成果

未来の職場環境について議論し、いかにテクノロジーが生産の諸側面において代替してきたか教え合った。PYたちは、既にロボットが労働の代替をしているという世界的な脅威の存在について共有した。しかし、ロボットやテクノロジーの最終的な目的は効率性や生産性の向上や、授業収益の拡大や高品質なサービスの維持であることも話し合った。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

ねらい

プロジェクト・マネジメントの理論について学び、それらを各参加国における事後活動に応用できるようにする。

活動

- PYは、4つの班に分かれて、模造紙とカラーペンを用いて綺麗な発表を作成した。
- プロジェクト・マネジメントの5段階について議論し、今後、PYが提案する事後活動を明確に計画できるように質疑応答が行われた。

成果

PYは積極的に活動に加わる事ができた。どのように目的や対象を設定し、解決策を構想し、提案したプロジェクトを実行できるのかについて議論した。

D. 決意・期待される今後の活動

PYは、雇用創出、採用情報の共有、ジョブフェア、各参加国におけるディーセント・ワークの促進に関する様々な行動計画を提案した。仕事に関しての重要な問題や、いかに日本や東南アジアにおいてディーセント・ワークを達成できるか話し合う土台として最も一般的なものはソーシャルメディアであろう。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

評価セッションでは、仕事の重要性について互いに考えを述べ合った。PYは、社会正義が現実のものになるには程遠く、そして政府はディーセント・ワークのW.O.R.K.Sを目指す我々の道程に欠かせない重要な利害関係者であるということ意見が一致した。W.O.R.K.Sとは、(1) 公正な給与（Wage）とスキルに対しての適切な報酬、(2) 仕事をして生活の糧を得る機会（Opportunity）、(3) より良い職場環境を得て、職場において安全に感じられる権利（Rights）、(4) 訓練やスキルの向上を通じて能力を得ることを意味する知識の移転（Knowledge-Transfer）、(5) 正職の保障（Security）を受け、働けるだけ働いていられる機会を手にする、ということである。

F. ファシリテーター所感

再びSSEAYPに参画する機会をいただいた内閣府に対し感謝申し上げたい。乗船が3回を数え、大変光栄である。ファシリテーターとして従事できることは素晴らしい学びの経験だ。

今年度は、ファシリテーターも事業自体も生みの痛みを経験したと考える。ファシリテーターは、事後活動セッションにおいて新しい視座を、理論的・学術的に提供することが求められた。そしてプロジェクト・マネジメントのセミナーから事後活動の計画に繋がるのは望ましい変化であり、これが続くことを願っている。今年度

のファシリテーターは、情報提供、プレゼンテーション、そして事業後に期待される成果に関して、多くの価値を与えることができたと思料する。

また、我々の多くにとって帰国報告会は本事業の比較的新しい側面であった。内閣府に対しての事後活動の計画や取組に関するプレゼンテーションからは、なぜ本事業が存在しているかの目的が見えた。事後活動まで落とし込むところが、他の青少年事業とは一線を画すのだ。

個人による社会活動のプロジェクトが注目を浴び、SSEAYPがコミュニティに対して変革の波を生み出すことを促す。こうしたプロジェクトが、PYに影響を与え、そして情報の共有や各参加国における青年主導のプロジェクトの実現に向けて共に汗をかく上で協調的たらしめた。

内閣府の掲げるビジョンはやや抽象的であり、我々ファシリテーターとしてはそれを状況に即して明確にしていた。また、ファシリテーター同士で、本事業がより良いものとなるために我々には何ができるか意見交換を行ったが、奏功したように思う。

本事業に対する私の見方も変わり、より俯瞰的に見るようになった。今年度の本事業に起きた変化は良いものであり、その末席を汚すことができ幸甚である。我々がここに集ったのは、次代のリーダーを育成し、若い市民がコミュニティにおいて積極的になれる土台を作り上げるといった目的を信じているからこそなのだから。

(5) 環境と持続可能性グループ

PY：35名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

現在の環境を取り巻く状況について理解し、気候変動や、日本とASEAN加盟国における生物多様性について認識する。その上で、発展と都市化と持続可能な社会を両立させることに対して、青年がいかに貢献できるかを議論する。

b. 期待される成果

- ・ 気候変動の原因や影響について、またそれらが特に日本とASEAN加盟国において、いかに環境や生物多様性と関連しているかの基本的かつ明確な理解をする。
- ・ 国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）において設定された目標に関連して、持続可能性に向けた解決策を描くにあたっての実践的な取組につき議論する。
- ・ 気候変動や持続可能な開発に焦点を当てた事後活動の提案プレゼンテーションを作成する。

c. 身につく能力

知識

- ・ 日本とASEAN加盟国における環境と生物多様性に対して気候変動の影響がもたらしている現状。
- ・ SDGs目標13「気候変動への対策」、目標14「海の豊かさを守る」、目標15「陸上生態系の保護」について理解する。
- ・ 日本とASEAN加盟国において持続可能な環境マネジメントのために現在とられている手段や戦略

スキル

- ・ 気候変動、環境マネジメント、持続可能な開発に関する主要な用語、戦略や枠組みが何であるかを見つけ、それについて理解する。
- ・ 気候変動や持続可能な開発に関する実践的な情報、教育やコミュニケーション教材についてグループや聴衆の前で発表し、提案する。
- ・ 主要な分析材料に基づいて、DG5での学習内容に関

した実行可能な事後活動の提案に努める。

行動

- 他者と交流し、セッションや課題別視察の中で触れられる話題について意見交換する。
- 環境保護や主な持続可能な開発においてなされている努力やその尊さについて認識する。
- 環境に対する責任ある管理者であり、持続可能性の唱道者としての役割を担おうとする。

B. 事前課題

個人課題

- 気候変動と持続可能な開発についての用語、概念、枠組みについて調べ、理解する。
- 最も関心や解決が必要とされている日本もしくはASEAN加盟国における環境問題について調査する。
- 環境保護もしくは持続可能な開発に尽力している個人について調査する。

国別課題

- 自国についての調査を行う。以下のものを全て用意すること。
 - 気候変動による影響の一覧
 - 気候変動の影響を減らすための取組や解決策の一覧
- パリ協定について調査する。
 - 自国の約束草案（INDC）についてのパワーポイントによるプレゼンテーションを用意する。
- 自国における持続可能な開発を表す写真を5枚持参する。
- 2～5名に対してインタビューを行い、SDGsについての一般的認知度を検証する。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設：国際航業株式会社

活動

- a. 講義及び全体議論
- b. 班別のワークショップ及び議論
- c. 実地調査

視察から学んだこと

- a. 特に各国が直面しているような一般的な環境問題に対する認識
- b. マップの作製やそれに類する作業の工程や裏側で起きていること。
- c. 解決策を生み出すための努力に見られる技術による正の影響。
- d. 災害の影響や環境保護の方法について理解できるようにするための、マップの作製やその類は、資源集約的（時間や費用がかかる）である。
- e. 人々の協働を通じて、また技術を活用して、日本で

環境が改善する変化がみられることから、希望を持つことができる。

グループ・ディスカッションI

ねらい

- a. 環境、気候変動、持続可能性に関する用語について理解する。
- b. 日本とASEAN加盟国における複雑な問題と現状について認識する。

活動

- a. パワーポイントによるプレゼンテーションと、関連ビデオの視聴
- b. 日本とASEAN加盟国の環境問題に関する情報共有
- c. 全体での議論

成果

- a. 実際の事例を参照しながら、環境、気候変動、持続可能性に関する主な用語について理解した。
- b. 日本とASEAN加盟国における極めて重要な環境問題について認識した。情報交換や議論を通じて、当該地域が直面する基本的な問題が何かを突き止めた。
- c. 話題に上がった問題の解決に向けた自らの取組について共有したというPYが全員に対して説明を行った。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- a. 気候変動について、その原因、影響や解決策など、十分に理解する。
- b. パリ協定について、また日本とASEAN加盟国のINDCについて知り、理解する。

活動

- a. INDCに関する国別発表
- b. パワーポイントによるプレゼンテーション及び関連ビデオの視聴
- c. 全体での議論

成果

- a. 気候変動についてや、いかにローカルからグローバルな規模にまで広がるかについて、知識を深めることができた。
- b. 気候危機は人間の活動が負うところが非常に大きいことを理解した。
- c. 気候変動が人々や動物の生息地、環境、農業、海洋に及ぼす負の影響、そして災害を引き起こす極端な天気について認識した。
- d. 国別プレゼンテーションを通じて、各国の状況について理解した。それにより、環境保護に向けた自らの行動に対して、より自覚的になった。
- e. 気候変動に対する他国の取組事例から学んだ。これにより、自国において必要となった際に応用しようという動機付けがなされた。

- f. パリ協定に見られるように、協働の重要性と、類似の問題に直面する国家間の具体的な合意の必要性を理解した。
- g. パリ協定についての主要な情報を得て、日本とASEAN加盟国のINDCを概観した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 環境マネジメントの重要性を認識する。
- b. 持続可能な開発の実現に適したトリプル・ボトム・ライン（社会・経済・環境）という枠組みとその有用性を理解する。

活動

- a. パワーポイントによるプレゼンテーションと、関連ビデオの視聴
- b. 持続可能な開発を表している写真の展示
- c. 展示についての班別での意見交換
- d. 全体での議論

成果

- a. 持続可能性とは単発のものでなく生活様式なのだとすることを学んだ。持続可能性を達成することは、使える資源を損なったり枯渇させたりすることなく人々が長生きするためにできることに絶えず取り組むという意味だ。
- b. 持続可能性といえば、循環型経済がとられるべきだと学んだ。物品が使えなくなった段階で、リサイクル又はアップサイクルすることが可能だ。
- c. 革新的な考えは、最適な解決法を得ようとするならば、文脈に沿った形で作り上げられなければならない。枠組みやアイデアは共有され得るが、各コミュニティや社会ごとにそれぞれの文脈に合うよう形を変えなければならない。
- d. 大小を問わず、一挙一動においてマインドフルネスの重要性を認識した。直接又は間接的に、いかなる問題へ対峙しているかが解決策に対して寄与するものである。
- e. 物事を知ることや教育を通じて、人は持続可能な生活様式を送るための、情報に基づいた責任ある意思決定を行うことができるということを確認した。

ベトナムにおける課題別視察

施設：ベトナム国家大学ホーチミン市校科学大学

活動

- a. 気候変動に関し、その原因や影響、解決策についての講義
- b. 講義について班別での話し合い
- c. 全体での議論

視察から学んだこと

- a. 気候変動の事例について関連性のある最新情報を得

て、これがどのように人々に影響するのかについて学んだ。

- b. 現況や代替手段、気候変動への対策として取り得る成功事例について理解を深めた。
- c. 気候変動を意識した行動を心掛けようという議論を通じて認識の度合いを強めた。
- d. 各参加国において採用され得る、今日の革新的技術や代替手段。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. SDGsについて認識する。
- b. 環境と生物多様性を守るためのSDGs目標13、14、15についてその意義を認識する。

活動

- a. パワーポイントによるプレゼンテーションと、関連ビデオの視聴
- b. SDGsに関する一般的な認知についての国別発表
- c. 日本とASEAN加盟国におけるSDGsの認知度について班別での情報共有
- d. 全体での議論

成果

- a. SDGsが、相互に関係し合う国際的なアジェンダであることを理解した。貧困に終止符を打ち、地球を守り、全ての人々が2030年までに17の目標が含まれた平和と繁栄を享受できるようにするというビジョンが掲げられている。
- b. PYは、SDGsを達成するために行われている日本とASEAN加盟国での具体的な取組の要点を知ることができた。
- c. 日本とASEAN加盟国におけるSDGsの低い認知度と理解不足について知った。
- d. PYは、SDGsの認知を広めることについて感化された。日本とASEAN加盟国間における協働には促進するに値するだけの余地がある。
- e. ASEAN加盟国の一部、具体的にはカンボジアとラオスは、SDGの18番目の目標として地雷問題に取り組むことを掲げていることを学んだ。
- f. SDGsの目標13「気候変動への対策」、目標14「海の豊かさを守る」、目標15「陸上生態系の保護」といった各目標が大いに取り組んでいる具体的な問題について理解した。
- g. 地球上の種の保存のために、生物多様性を守ることが肝要であると理解した。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- a. 日本とASEAN加盟国によるSDGs、特に目標13、14、15に対しての努力度合いを報告・測定する。

- b. SDGs達成に向けた個人、コミュニティ、組織による取組の情報を共有する。

活動

- a. 日本とASEAN加盟国のSDGsロードマップ
- b. 持続可能性や環境保護についてのPYによる取組の情報共有
- c. 環境や持続可能な開発についての社会活動の情報共有
- d. 全体での議論

成果

- a. 日本とASEAN加盟国のSDGsロードマップを通じて、SDGsの17の目標についての文脈と、それらの相互関連性や相互依存性について理解を深めた。
- b. SDGsの目標13、14、15の主眼についてより明確に理解することができた。
- c. SDGsの目標13、14、15に関連した、日本とASEANの11か国における取組の紹介を通じて、それぞれの目標への理解から現実の文脈でどう位置付けられているかまで広げることができた。
- d. SDGsの目標13、14、15に関連して、PYが各自のコミュニティでどのような個人的プロジェクトを行っているか話を聞き、その意義を学んだ。
- e. SDGsに関する国家規模やコミュニティ規模の取組についての議論によって、PYはSDGsの目標13、14、15の効果につき分析することができた。多くのPYは、現状の取組は国の法律に偏っており、コミュニティにおいては欠如しているという意見で一致した。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

活動

- a. 議論と素材の準備、そして全体に向けた主な学びの共有
- b. 成果発表会に向けたプレゼンテーションにおける目次の最終調整
- c. 成果発表会のプレゼンテーションや提言内容についてのフィードバック

成果

- a. 全体での議論やフィードバックの時間を通して、PYは互いに助け合ってプレゼンテーションの最終調整や意見出しを行った。
- b. PYは、成果発表会に向けたプレゼンテーションの内容や説明の計画について最後の仕上げに取り組むことができた。

D. 決意・期待される今後の活動

- a. PYは、個人、コミュニティから国家的規模に至るまで数多くの段階を通して本質的な変化が始まると議論した。参考に値する特筆すべき戦略としては、まずアイデアについて小さなコミュニティ規模で試験を行うという、シンガポールでの取組に倣ったもの

が挙げられる。

- b. 日本とASEAN加盟国において環境問題や持続可能性についての社会的活動や従事する人々について学んだ。この情報共有セッションでの触発をとおして、PYは、自らの家庭、コミュニティもしくは国において実行可能な持続可能性や環境に関連したアイデアを得ることができた。
- c. PYは、帰国後に自国において実行可能な主な学びや取組を列挙した。ソーシャルメディアを通じて国際的なパートナーシップを形成することや、きちんと分別すればごみが資源になるということの認知を広めるなどが含まれる。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

- a. 総じて、PYによってDGが公式に始まる前に設定された目標は達成された。PYのほとんどは、DGにおける自らの貢献に対して満足した。
- b. 各回での発表や議論や情報共有が、環境や持続可能性、その他関連事項についての理解を深める一助になったとPYは強調した。
- c. PYが毎回のDGや課題別視察を通じて、情報や意見の共有、学びに対して開けた姿勢であったのは助けとなった。このような姿勢が、フェイスブックのDGグループにおいて今後も続く気候変動への対策の情報交換や、ホームステイや課題別視察で見られた持続可能性に関する実践をする上で鍵となる。

F. ファシリテーター所感

私を信任いただきSSEAYPに再び加わって環境や持続可能性についての知見を共有する機会を与えてくださった全ての皆様に感謝申し上げます。私の知見を共有するにとどまらず、DG5のPYから私が学ぶ素晴らしい機会であったと総括している。

各々の国において善い変化をもたらすことに強い情熱を傾けるこれからのリーダーたちに囲まれる経験は、光栄なものであった。

どうしてDG5を選んだかと質問された際、全員が、我々の直面する環境問題、また自分たちは具体的に何ができるのか、そして自分たちの行動は持続可能性に繋がっているということについてもっと知りたいと答えた。このDGテーマほど、本事業のように影響力のあるプログラムにおいて適切で時宜を得たものはないだろうと考える。

環境や持続可能性という領域においての様々な視点を得られた課題別視察から、PYは多くを学んだ。さらに、こうした経験はPYが議論することを通じて、意見交換をしていく中で深みのあるものとなった。事業中にPYが作成したフェイスブックのチャットグループは、気候変動への対策やホームステイで目にした持続可能性

に關した実践法を共有する上で非常に有用である。

全ての議論を振り返ってみると、常に「変革」が強調されていた。我々の直面する厄介で複雑な問題の根本を十分に知り理解して初めてそのようなものはもたらされ得るのである。状況を一層悪くさせている慣行の真逆を行くことに取り組む気概を我々が持って初めて、変革は起き得るのだ。私は、環境保護と持続可能な開発に向け

て必要になる本物の変革を推し進める35名の同志をこのDGで見つけることができた。

我々は、ありったけの力で、全身全霊でこの取組を続けていく。我々全員、そして次世代にとって、この世界をより良い場所にしていこうではないか。地球が救いを求めているのではない。我々は、持続可能性や人間性のために、今一度自らの行いを見直すべきである。

(6) 健康とウェルビーインググループ

PY：37名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

青年の健康を身体的、精神的、社会的な視座より考察する。特に、青年の精神衛生にまつわる状況や課題を取り扱う。同時に、青年にとっての理想的なウェルビーイングとは何か、それを達成する方法は何かについても考察を行う。

b. 期待される効果

- 国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）で言及される青年のウェルビーイング及びアジアの青年に関する健康について理解を深める。
- 青年の健康に関する9つの領域について、国際的な見地から、また特に日本とASEAN加盟国の場合、そして特段、精神衛生に限った場合について、豊富な知識を得る。
- 今日の状況下で精神衛生を健康に保つに当たっての課題を認識し、世界における、また日本とASEAN加盟国における、青年の精神衛生をサポートする取組や運動、政策を批判的に分析する。
- 精神衛生とウェルビーイングに対する、青年の見地からの精緻な理解を行う。また、青年のウェルビーイングを促進するための効果的で創造的な取組を提案する。

c. 身につく能力

知識

- SDGsに基づく、健康とウェルビーイングについての精緻で文脈に即した理解を得る。
- 国際的な見地からの、そして特に日本とASEAN各国の見地からの、青年の健康に関する現況について理解を深める。
- 青年の精神衛生とウェルビーイングをサポートする取組や運動、政策を批判的に見る。
- 精神衛生とウェルビーイングについての、有意義な見方
- 青年の立場から見て、日本とASEAN各国における青年の精神衛生とウェルビーイングとは何かを定義

し、それらを良好なものとするためにどうすれば良いのか考える。

スキル

- 議論やグループワークを通じ、多様な環境下で学び、協働する能力をかん養する。
- 文脈の中から問題を見つけ、そして問題解決の際には批判的に思考する。
- 文章や口頭で持論を策定し、考えを伝える能力を身に着ける。
- 聴衆の前で話したり、説得的なコミュニケーションを行ったりなど、実践的なプレゼンテーション・スキルを向上させる。
- 取組を企画し、達成のために管理する能力を得る。

行動

- 対人：相互学習する。
- リーダーシップ：コミュニティの問題を理解し、行動を起こす。
- 態度：共生的で、開かれた姿勢
- 多文化の違い、人種やジェンダー・アイデンティティ、社会正義について批判的で敏感である。

B. 事前課題

個人課題 1

自分で写真を1枚撮影し、英語で50ワードのキャプションを付けて印刷する。「青年のウェルビーイングと聞いて連想するもの」を意識して撮影すること。

個人課題 2

2018年9月から現在までの期間の、自国において社会的・経済的に恵まれない青年の健康に関するニュースを、メディアから1編見つけること。

個人課題 3

メンタルヘルス・イノベーション・ネットワーク・イニシアチブというウェブサイトにて「アジア」（Asian）や「青年」（adolescent）でソートし、精神衛生についての個人的な経験やコミュニティが抱える問題に最も関連した取組についてコメントを書く。

国別課題 1

参加国ごとにポスターを作成する。手書きでもソフトウェアを使用して印刷したものでも構わない。創造性のあるものにするように。ポスターの背景は地図の絵とし、また自国の青年が抱える健康問題を表すシンボルを使用すること。

国別課題 2

自国において青年の健康とウェルビーイングを支援している事業の紹介を5～10例、説明文を付けてパワーポイントで作成すること。

国別課題 3

青年の精神衛生とウェルビーイングをサポートしている現在の政策、政府プログラム、コミュニティによる行動や運動の紹介をパワーポイントで作成すること。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設 1：認定特定非営利活動法人カタリバb-lab（文京区青少年プラザ）

活動

- 同施設の紹介プレゼンテーション及び同施設の背景、活動についての質疑応答、そして見学。
- 班に分かれて、同施設は青年にとってどれだけ適切であるか、どうすれば理想的になるかをフィードバックする。

視察から学んだこと

- 同施設の持つ価値観について学んだ。活動的で、青年間の健康的な関係性を築き、青年が必要としていることに対応する、というものであった。
- 非営利団体や活動に対する政府の支援は、コミュニティの精神衛生にとって極めて重要である。

施設 2：認定特定非営利活動法人PIECES

活動

- 責任者から、同団体についての概要や活動内容、青年に関する問題についてのプレゼンテーションがなされた。
- 同団体の活動に関係する青年の健康問題についてグループワークとプレゼンテーションを行った。

視察から学んだこと

- 子供が孤立してしまうと精神的な衰弱に繋がり、その子供の将来に影響し得る。
- 子供を尊重することをより広め、耳を傾け、子供の声や考えを社会に届けることで健康的に子供たちが育つことが重要である。

グループ・ディスカッション I

ねらい

- 本DGでの学びの目標設定を行う。

- 青年や思春期、ヤングアダルトといった異なる語句について学び、その違いを知る。
- 青年のためのSDGsについて学ぶ。

活動

- 班に分かれて、個人目標を書き、班内で共有した。班の代表はそれらを全体に発表した。
- 青年や若者の異なる定義について講義と双方向的な議論を行った。青年の年齢というのは移ろいやすい概念であるという発見があった。
- SDGsにおける、青年の問題が抱える重大性に関して講義を行った。

成果

- PYの目標は似通っており、自分や他者を助けるために精神衛生について学ぶというものであった。
- 日本とASEAN各国における青年のウェルビーイングについての類似状況や懸念、意向について学んだ。
- 青年とその類語について学んだ。

グループ・ディスカッション II

ねらい

- SDGsの指標に基づいたウェルビーイングの指標について学び、参加国における青年を取り巻く状況について議論を行う。
- 青年期の健康とウェルビーイングの研究が持つ目的、青年の健康について世界的によくある問題、日本とASEAN各国における青年の健康を取り巻く現状について学ぶ。
- 社会の決定要因、健康を増進し守る要素について学び、分析を行う。

活動

- PYは、自らの思ったことを記録するべく紙に書きとどめた。
- 2017年のウェルビーイング指標における重大な発見、青年期の健康とウェルビーイングを研究することの重要性、若者の脳の成長について概説する講義を行った。
- 各PYは個人課題 1 についてプレゼンテーションを行った。そして、写真とウェルビーイングの意味について議論した。
- 世界、ASEAN加盟国、日本における、一般的な青年の健康問題、健康を増進し守る要素、精神衛生の社会的決定要因について概説する講義を行った。
- PYは、自国における青年の健康問題に関する国別課題についてプレゼンテーションを行った。

成果

- 各自が、ウェルビーイングについての自らの定義を持っており、それらは理解と尊重をされる必要がある。ウェルビーイングが家族や友人関係に関係すると考える者もいれば、自由やリラックスしているこ

とだと考える者もいる。

- b. 健康とは、ウェルビーイングの一側面でしかない。
- c. 各国における青年の健康問題、例えば働き過ぎの文化がもたらす日本の過労死、マレーシアの肥満、ラオスのHIV問題について学んだ。
- d. 配偶者間レイプ、暴行、親しい間柄での暴力、ジェンダーに基づく暴力などのソーシャルヘルスに関連した新しい用語を学んだ。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 青年の健康問題について学んだ後に、日本と東南アジアの国々における類似点や相違点について議論する。
- b. 青年の精神衛生を研究する目的と、SDGsにおける枠組みについて学ぶ。
- c. 恵まれない境遇にある青年を含め、青年の精神衛生とウェルビーイングを良好なものにする上で課題となるものが何かを特定する。
- d. 青年の精神衛生とウェルビーイングを良好なものにするための、各参加国における現在の取組について学ぶ。

活動

- a. 青年の健康問題についての国別課題の発表を引き続き行った。
- b. 日本と東南アジアの国々における青年の健康問題についての類似点や相違点に関して活発に議論した。
- c. 議論の結論を精神衛生とウェルビーイングの定義に組み込み、青年の精神衛生問題の広がり、SDGsにおける枠組みについても言及した。
- d. 参加国によらない班分けを行い、班別で個別課題2と3について議論を行った。

成果

- a. ピアプレッシャー、自己同一性、コミュニティでの居場所など、青年の精神衛生に関する一般的な問題について深い議論を行った。
- b. 精神衛生やその他の健康問題に関する懸念に対して各参加国では独自の取組がなされていた。
- c. より健全なコミュニケーションを実現するためには、健康増進の活動を実行する必要性がある。

ベトナムにおける課題別視察

施設：ファムゴックタック医科大学

活動

- a. 幸福についてのプレゼンテーションを受け、動画を視聴した。青年の身体的、精神的、社会的な健康が取り扱われた。
- b. 班別に、地元の学生たちと一緒に身体的、精神的、社会的な健康の要素とは何かについて議論した。

視察から学んだこと

- a. 幸福は青年の健康全体に寄与するが、それは何か追いかけるものではなく、今を生きることによって感じられるものである。
- b. ウェルビーイングを達成するために若者は健康的な生活様式を取り入れる必要がある。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. 各参加国における青年の健康とウェルビーイングのための支援サービスについて知る。
- b. 精神衛生の介入ピラミッドについて学ぶ。
- c. 青年の精神衛生とウェルビーイングを世界的に支援するために現在行われている取組、政策、事業について学ぶ。
- d. 精神衛生を変質させるのに若者を巻き込むうえでの法則について学ぶ。
- e. 青年の精神衛生を支援する上での多分野によるアプローチについて考察する。

活動

- a. 参加国を問わない班分けを行い、個人課題2と3について議論を行った。
- b. 精神衛生サービスにおける介入ピラミッドと、若者が精神衛生を変質させる政策について概説する講義を行った。
- c. ワールド・カフェ形式で互いの班に対するフィードバックを行い、友人・教師・学校・両親・メディア・非営利団体や行政からの青年の健康に対する支援について議論を行った。

成果

- a. 日本とASEAN各国のほとんどにおいては、総合的なものから具体的なものに至るまで、恵まれない人々に向けたウェルビーイングの支援サービスが存在する。
- b. 良質なサービスの存在は、偏見に対峙するという課題と密接に関係している。
- c. 文化、ジェンダー問題、社会的な不備が、プレッシャーやウェルビーイングに関連した精神衛生に影響している。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- a. アジアの若者の特徴を分析し、アジアの青年の健康とウェルビーイングの文脈に位置づける。
- b. 健康に関する介入レベルと若者の取組について学ぶ。
- c. ニーズを考慮しながら、青年の精神衛生とウェルビーイングを良好なものにするのを支援するためのアイデアを構想する。

活動

- a. ワールド・カフェ形式で、友人・教師・学校・両親

親・メディア・非営利団体や行政からの青年の健康に対する支援についての議論を引き続き行った。

- b. 偏見や一般的なものなど、アジアに見られる特徴について活発な議論を行った。
- c. 健康的な人間と不健康な人間の絵を描き、それぞれの若いアジア人の特徴について考察した。
- d. 健康な若者の介入レベルについて概説する講義を行い、健康分野における青年のリーダーシップに関する世界保健機関による動画を視聴した。
- e. 船上での自主活動の案について議論した。

成果

- a. 日本とASEANの若者が抱える問題の一部は、アジア的な要素から起因している。両親と子供の関係性や社会からの期待に応えることなどである。
- b. 学校や行政、非営利団体やメディアなど、多くの利害関係者が等しく青年の精神衛生を支援する役割を担っている。
- c. 青年の健康とウェルビーイングを支えるうえで、十分な仲間や家族の存在は大きい。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション ねらい

- a. DGでの学びに基づいてプロジェクト案を考える
- b. DGテーマに関連したトピックについて、プロジェクト・マネジメントの手法を適用する。

活動

- a. 3つの班に分かれて、プロジェクト・マネジメントと計画の実行の演習を行う。
- b. 上記に関して発表を行ったPYは、他のPYやファシリテーターからフィードバックを受けた。

成果

- a. プロジェクトの実行に関するアイデアには、水の確保や、青年の精神衛生についての認知、若者の健康的な生活様式についてのものがあつた。
- b. PYは、限られた時間の中で、ニーズに対する一般的な施策として実行、時間軸、評価までの計画を立てた。

自主活動

事業の後半、DG6は船内でPYの健康とウェルビーイングをサポートする複数の自主活動を企画した。(1) ケアリング・メールボックス。秘密の手紙にPYが自らの感情を吐露するものである。(2) 「何もしない」セッション。これは、シアターで穏やかな音楽を聴き、何もしないでいるという、日々の忙しさから離れる試みである。中には、シアターに行って昼寝をして英気を養った者もいた。(3) 乗組員への感謝を綴った手紙。PYは、お世話になっていることに対して乗組員に心からの感謝の気持ちを伝えた。乗組員には、小さな贈り物や手紙がPYから受け渡され、良い関係性を築くことができた。

D. 決意・期待される今後の活動

PYは、自分そして他者のために、青年のウェルビーイングを良好なものにするための様々な方法を学んだ。そこで、偏見に反対して助けを求めるよう促し、自殺の偏見を破り、その他精神衛生上の問題についても身の回りから会話を始めることで、自国や自分のコミュニティにおける精神衛生についての言説を変える方法を提示した。さらに、成果発表会においては、青年の健康とウェルビーイングを支える活動を共有するためのフェイスブック・ページ「プロジェクト・センチメンタル」を提案した。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

自己評価セッションは、事業終了の3日前に行われ、PYが初回に自ら設定した目標を振り返った。そして第一歩となる帰国後の行動と、これまでの全てのセッションを振り返って主な学びは何であったかを議論した。最も多い意見は、小さな班に分かれての議論で、他のPYから日本と東南アジアの国々における青年の健康について知ることができたというものであった。さらに、アジアの青年は総じて、東洋に身を置く青年が持つ文化的な価値観の下、いくつかの問題を共有していると学んだ。そして、PYは、青年の精神衛生の問題の全てを一気に解決できる策はなく、一つひとつの行動が大事となり、実に簡単なことから始めることができると振り返った。その後、ファシリテーターは主要な精神衛生上の問題について紹介し、PYに対して、風説や誤解に関して何をを変えたいと思い、自分たちのコミュニティにおいてどのように変化を起こせるかを問うた。挙がった問題は、自殺やうつ、産後うつなどであった。PYは、他者のために、そして自分自身のために、手を差し伸べる者になり、健康の提唱者となるためのアイデアをいくつか考え出した。最後に、事業後、PYが健康の提唱者となり、健康についての未来のリーダーとなり、自らの国やコミュニティにおいて青年の健康にかかわる問題に取り組むために、ファシリテーターは「一度PYになれば、永遠にPY」という精神を持ち続けるための要諦を共有した。

F. ファシリテーター所感

健康とウェルビーイングというテーマについては当初、青年の社会参加やアジアの文化という見地から取り組み、PYは国の代表として自らの考えを披露し、ファシリテーターがアジアや東洋的な文化という文脈を提示するものを想定していた。いざ始まってみると実際には、ファシリテーターは東南アジアにおける青年の健康問題について総論を述べることとなった。とはいえ、健康とウェルビーイングは多くのPYにとって新しいトピックであるため、全体を通して様子を見て調整を施さねばならなかった。参加型の学習をさせることはとても

難しいため、深い議論ができたこともあればそうでなかったことも確かである。また、国別課題、特に各国の健康問題については、出来栄がまちまちであり、そのため全ての参加国が参考になるものとはならなかった。そういうこともあったが、ファシリテーターは知識を捕捉し、PYに向けて精神衛生に関する用語について平易な言葉で説明を施すことに努めた。

ファシリテーターとして学んだことは、何らかの健康分野での経験が必要となる専門的な知識について話すのではなく、十分な時間の下に、PYの個人的な経験を引き出すような一つか二つにトピックを絞った議論をすれ

ば、一定以上の深さのものができるということ、また、5回全てを振り返って、健康とウェルビーイングという広範なトピックについては、教材が深く実践的なものであればPYのためになり自国に学んだ内容を持ち帰れるということだ。例えば、精神衛生についての風説や誤解についての議論や、青年向けに健康増進のための教材を作成することに的を絞るといった具合だ。青年のウェルビーイングを良好なものにするという認識とそのための方法を促進しようという当初の思惑は、少なくともPY個人が将来の健康を考えるうえで役に立てくれることだろう。

(7) 情報とメディアグループ

PY：38名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

日常の情報とメディアによる社会的な影響について理解する。その上で、人々がメッセージの送り手・受け手として、どのように情報とメディアを用いるべきかにつき、情報リテラシーを備えることの重要性を議論する。さらに、市民ジャーナリズム及び戦略的なコミュニケーション・マネジメントについて知識とスキルを獲得する。最後に、得た知識を事後活動に活かせるようになる。

b. 期待される効果

- 情報とメディア（伝統的なメディアと新しいメディアの双方）についての概念と現況、そしてどのようにすれば情報リテラシーを備えたといえるのかについて理解する。
- 日本とアジアの国々におけるメディア状況について互いに理解する。
- （情報の受け手・送り手として）戦略的で積極的なメディアの活用者となり、効果的かつ効率よく社会に資する事後活動において知識を用いることができるようになる。

c. 身につく能力

知識

- 情報とメディア、そして変化の渦中におけるそれらの効果について
- メディアリテラシーについて
- 日本とアジアの国々におけるメディアの状況について
- コンテンツの作成と流通について
- 市民ジャーナリズム及び戦略的なコミュニケーション・マネジメントについて

スキル

- 批判的思考力
- メディアリテラシー

- 多文化の環境下でのリーダーシップ、傾聴、グループ・ディスカッション、演説、プレゼンテーション、といった対人能力
- ジャーナリズムと戦略的なマネジメントにおけるコミュニケーションスキル

行動

- 送り手であり受け手として、情報とメディアにおいて積極的である。
- 自らの属する社会において、特に情報とメディアについての模範や変化の担い手となる。
- 事後活動を始め、協働し、主導する。

B. 事前課題

個人課題 1

自国からメディア（新聞や雑誌）を持参する。

個人課題 2

自身のメディア消費を顧みて、要約したものを用意する。

個人課題 3

自身のメディアリテラシーへの理解について記述する。

個人課題 4

オンライン調査としてグーグル・フォームに、自身の日常におけるメディア利用について記入する。

個人課題 5

自身がどのようなテレビ番組や映画を視聴しているか、メディアコンテンツについて要約したものを用意する。

個人課題 6

情報とメディアについてのおおまかな概念に目を通す。デジタルメディアについての2編の文書を読み、デジタルコンテンツの良い点と悪い点が何かを用意する。

国別課題 1

自国におけるメディアの状況（大手印刷メディア、報道・ニュースメディア、メディア消費と規制）について

5分間のプレゼンテーションを用意する。

国別課題2

情報とメディアについての知識、もしくはこれまでの問題や、社会にとって持続可能な便益を生んだプロジェクトから着想を得た事後活動の草案を用意する。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設：株式会社博報堂DYホールディングス

博報堂は1895年に創業し、日本で2番目、世界で12番目に大きい広告代理店である。同社は、消費者と社会的な潮流について調査するため1981年に設立された博報堂総合生活研究所で有名である。

PYにとっては、目を見張るようなプロジェクト群が印象的であった。先方からの知識の供給量が膨大だったため、質疑応答も含めて議論の時間が短すぎたとPYは感じた。というのも、PYはメディア消費と創造性について話し合いたかったからである。しかしながら、博報堂への課題別視察は、日本と東南アジアにおけるメディアの発展に対する関心を喚起することになった。

活動

- 同社の背景や哲学を概説していただいた。
- 日本におけるメディアの状況や潮流、メディア消費行動と広告の事例研究について調査結果を共有いただいた。
- 社員の主導で、班に分かれてメディア状況と事例研究についてグループ・ディスカッションを行った。

視察から学んだこと

- 同社が持つ歴史や、消費者の生活に新しい考えや潮流を生み出すために全体的に取り組んでいる手法として「生活者」の哲学を持っていることを学んだ。そして、ホールスタッフとして認知症の方々を雇用したイベント型レストラン「注文を間違える料理店」など、同哲学にまつわるプロジェクトについて学んだ。
- 現在のメディア環境。PYは、東京でのメディア消費の状況について、デジタルメディアに向かう傾向があることを知った。博報堂では、メディア消費、情報行動パターン、メディアの生活様式についての調査結果を共有いただいた。それは、消費者が複数の画面を用いて生活しており、スマートフォンに多くの時間を費やし、無料の情報源よりも更に満足できるメディア消費体験を作り出したいと思っているというものだ。そして、消費者は情報過多に感じているということであった。
- クリエイティブ広告において「最古と最新」の融合を行っている事例にPYは感心した。その例としてライスコード（スマートフォンを用いて田んぼアートをQRコードのように読み取ることで米が購入でき

るアプリ）が紹介されたが、モノのインターネットの時代が到来して全てがメディアとなり得ることから、人々とコミュニケーションをとり満足させる上で広告のクリエイティブを作り変えている。

- グループ・ディスカッションと事例研究を通して、PYはメディア状況について学んだ。

グループ・ディスカッションI：日常におけるメディアねらい

- 情報とメディアの概念、メディアからの複数使用とその効果について理解する。
- メディアリテラシーの重要性を知り、どのように備えるかを学ぶ。

活動

- コミュニケーションと情報とメディアの概念についてファシリテーターがプレゼンテーションを行った。
- 自国から持参したニュースを用いて自己紹介を行った。この目的はメディアとそのコンテンツについて慣れるためである。
- ファシリテーターは、第46回SSEAYPにおけるメディア行動についての調査結果を紹介した。
- PYは、自分たちの日常におけるメディアのもたらす効果について知るべく、メディアのコンテンツとメディア消費行動について議論した。
- ファシリテーターは、メディアリテラシーの基礎的要素の概念についてプレゼンテーションを行った。この目的は、PYがそれを道具として用いて、メディアリテラシーを備えるためである。

成果

「魚は、自分が濡れているということを知っているだろうか」という問いから始まり、PYは情報とメディアについての概念を理解した。この問いは、人々がメディアに圧倒されているのを無意識に、メディアを使用しているということの例えである。さらに、PYのメディア消費調査の結果は、より信頼できていると思っている伝統的メディアよりも、より信頼できないと自分で思っているデジタルメディアにより長い時間を費やしているというものだった。PYは、自分がメディアから受けている影響に疑問を持たずに積極的にも受動的にもメディアを使用しているということを理解した。ファシリテーターは、PYが要点をつかめるよう、これをメディアリテラシーへの導入に用いた。その結果、PYはメディアリテラシーの重要性を認識した。この回の最後には、メディアとその効果についての理解を再確認するために、異なるタイプのコンテンツによって構成されるニュースボードが作成された。

グループ・ディスカッションIIねらい

- メディアリテラシーを備えるため、メディア組織の目的、メディアコンテンツの製作者と拡散者、メディアの影響と効果について理解する。
- 日本と東南アジアの国々におけるメディアの状況を理解し、メディアシステムの違いを通して知識の交換を行う。

活動

- ファシリテーターが、メディアの相互所有、メディアの集中、報道の自由について概説するプレゼンテーションを行った。
- PYは、自国のメディア状況についてプレゼンテーションを行った。
- PYは班に分かれて、メディア状況とメディアの問題について議論し、互いに学び合った内容についてプレゼンテーションを行った。

成果

- メディア消費、大手メディア組織とプラットフォーム、現況、情報とメディアについての示唆や統制についてなど、日本と東南アジアの国々におけるメディア状況について学んだ。
- 日本と東南アジアの国々におけるメディア状況について理解し、異なるメディアプラットフォームの見方をするできるようになり、各国の格差やベストプラクティスについて認識した。
- メディア組織の負う責任の重大性について知った。

グループ・ディスカッションIII：情報とメディアはどのように作られるかねらい

- メディアを取り巻く状況について理解したことを受けて、メディアに乗るコンテンツの種類とどのように意味がつくられていくかについて知る。
- メディアコンテンツ、効果や倫理に関する問題について学ぶ。

活動

- ファシリテーターは、ジャーナリズム、広告やPRなど、異なる種類のメディアコンテンツについてプレゼンテーションを行い、PYはそれぞれに異なる目的や制作方法があるあるということを学んだ。
- PYは班に分かれて、各自が自国から持ち寄った新聞に基づいて、説得的な広告キャンペーンを作ることを通じ、メディアコンテンツの持つ意味はどのように作られるかを議論した。
- PYは、選択したメディア活動によって2つの班に分かれた。一方はテレビ番組を視聴し、もう一方は映画を視聴し、それらのメディアに見られる意味の作り上げ（暗示的と明示的の双方とも）について議論

した。

成果

- ジャーナリズム、広告やPRの概念について理解した。
- 特に広告に見られるメディアの説得的な力について認識した。また、アジェンダ設定の理論について学び、顧客の意思は操作され得ることを知った。
- 意味の重要性と、文化におけるメディアの影響とメディアがいかに人々の行動を変えたかを反映している批判・文化モデルについて学んだ。その後、『スパイダーマン：ホームカミング』を題材に、映画やテレビ番組における隠れたコンテンツを探した。
- 広告キャンペーンからは、戦略的にキャンペーンを張る際の5つの鍵となる質問を学んだ。各班で楽しくクリエイティブな手法でコンテンツの制作と発表を行って、PYは、広告キャンペーンを精緻に企画する必要性を学んだ。
- デマやフェイクニュースといった誤解を招くコンテンツは新しいものではなく、大昔からあったということを知った。ただし、問題となっているのは流布するニュースの複製や膨張があるからである。
- メディア倫理と行動規範の重要性を理解した。

ベトナムにおける課題別視察施設：ホーチミン市新聞センター

同センターは2019年3月18日付の市議会の決定により設立された。同市の、また国際的な報道機関に対してサービスを提供する機能を持った、ベトナムで初めてのプラットフォームである。

活動

- 破壊的技術の時代における情報とコミュニケーションについての講義が行われた。
- 与えられたトピックについてPYは地元青年たちと議論と発表を行った。

視察から学んだこと

- ホーチミン市人文社会科学大学のTrieu Thanh Le博士による「破壊的技術の時代における情報とコミュニケーション：その長所と課題」と題された講義を受け、デジタルメディアを取り巻く状況とその効果について知識を得た。
- PYは複数のトピックについて地元青年たちと議論するため、班分けを行った。与えられたトピックは次のとおりである。「生産的に、安全に、効果的にメディアを使うには」、「どのようにしてフェイクニュースに気付き、防げるか」、「いかにしてメディアを活用して日本・ASEAN間を繋げ、活動を交換することができるか、またその役割とは何か」。PYと地元青年たちはトピックについて学び、互いについて理解することができた。議論の結論は満足できるレベルの高さであった。

グループ・ディスカッションⅣ：デジタルメディア： その機会と脅威

ねらい

デジタルメディアのリテラシーを備えるために、デジタルメディアの概念と、それが及ぼす効果について、機会と脅威の両面から理解する。

活動

- ファシリテーターは、デジタル化、インターネットとモバイルテクノロジーの概念について紹介した。
- 複数の班に分かれて、2つの記事「社会におけるソーシャルメディアの功罪に関する研究」と「銃事件後、『フェイクニュースが怒りや憎しみを大いに増長させている』とトランプ大統領」について議論し、そこから何を見つけたか発表した。
- PYが自国から持ち寄った事例に基づき、ソーシャルメディアのコンテンツ（特にフェイクニュース）がもたらす功罪について共有し、議論を行った。

成果

- デジタルメディアとその効果についてさらに理解を深めた。
- 記事を読み、PYはその要旨や、はらむ問題について議論し、それらについての解決策や提言を行うことができた。
- 各国から持ち寄ったソーシャルメディアコンテンツの功罪に関する事例について学び、それらがはらむ問題に対してどのように解決策を見つけることができるか議論した。

グループ・ディスカッションⅤ：積極的・戦略的にメディアを使う

ねらい

積極的なメディア・ユーザーとして、市民ジャーナリズムの概念と役割、ニュース報道の基本について理解し、またニュースを報じることができるようになる。

活動

- ファシリテーターは、市民ジャーナリズムの概念とその役割について紹介した。
- ファシリテーターは、基本的なニュース報道の考え方について紹介した。
- PYは班に分かれて議論し、興味関心のある分野におけるニュースを作成した。

成果

市民ジャーナリズムとニュース報道の基本に関する知識を確認するため、PYは班に分かれて、自ら興味のある分野におけるニュースについて議論・作成した。各班はトピックを、にっぽん丸、食、乗組員、生活、旅行という5つに分類した。ニュースを書くにあたって、PYは時間、またデータ収集が必要となった。その後、PYの基本的なニュース作成に関する理解に基づいて発表さ

れたニュースについて、適宜ファシリテーターは提案を行った。ここでは、PYがニュース報道の基本を理解したことだけではなく、PYが創造的であるかが分かった。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション ねらい

事後活動の設計と実行に関する考え方の説明を受け、事後活動を理解・企画・管理できるようになる。それに加えて、戦略的なコミュニケーション・マネジメントの考え方を、事後活動に応用できるようにする。

活動

- ファシリテーターが事後活動の設計と実行について概説した。
- PYが事後活動に活用できるよう、ファシリテーターは、戦略的なコミュニケーション・マネジメントの考え方を紹介した。
- PYは事後活動を議論・開始するべく班に分かれて、また事後活動の設計と実行の考え方を適用した。

成果

PYは、プロジェクトの企画と実行について理解した。時間の関係から成果物は具体性に欠けたものの、ここでは、いかに上手くPYが自らの知識と、ディスカッションとワークショップで得られた経験をものにしているかが分かった。PYはこうした考え方を事後活動の企画や実行の際に応用できることが期待される。

D. 決意・期待される今後の活動

昨年度と異なり、DGで得られた知識についてのプレゼンテーションは一日がかりで行われた。「DG Day」と呼ばれ、午前中に発表が、午後に展示が行われた。発表について、PYは創造性にあふれマルチメディアを駆使した「エデュテイメント（教育エンターテイメント）」の手法を用いて、自らDGで得た知識についてのプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは、旧来的なものではなく、ロールプレイ、視覚情報、動画、楽曲を組み込んだものだった。これは、「エデュテイメント」が聴衆を惹きつけ、最終的に学びにつなげることができるとPYが考えたからである。加えて、展示は学んだ内容の要点を更に詳説する機会を与え、全てのDGのPYが互いに知識を共有できるようにするためのものであった。全ての展示はクリエイティブに紹介されていた。PYにとって、ここでの成果は満足度の高いものとなった。さらに、PYの一部には、感化されて自らの行動をより良いものにしようと思ったり、SSEAYPのネットワークの中で知識を応用させようと考え始めたりした者もいた。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

PYが、ディスカッションでの学びを思い出し、振り

返り、自己評価ができるように、ファシリテーターはDGテーマと期待された成果を改めて提示した。PYは班に分かれて自らの振り返りを話し合い、班ごとにそこで何が分かったかを発表した。

DGテーマの期待された成果に照らし、知識を得て日常におけるメディアの使用、メディア組織、メディアコンテンツと意味、といったメディアリテラシーを身に着けるのに資する理解をしたことから、情報・メディアの積極的な送り手・受け手になった、とはPYの弁である。ほとんどのPYは、メディアリテラシーを備え、その知識を日常生活において活用すると言った。

PYは改めて、いかに人がメディアの使用に際してその効果を考えることなく行動しているかという「魚の原理」に言及し、メディアリテラシーの認識と知識を得る一助となるべくこの考えを他者に伝えていきたいと述べた。

PYは、日本と東南アジアの国々におけるメディアの状況について知れたことを有難く思い、異なるメディア状況に対して理解と尊重を示した。

PYは、プレゼンテーションの技術、広告キャンペーン、市民ジャーナリズムと戦略的なコミュニケーション・マネジメントについて強い関心を示し、メッセージをより効果的・効率的に伝えるため、これらについて更に深く知りたかった。

PYは、破壊的技術の状況と効果について理解し、モノのインターネットによって変化する時代においていかにメディアリテラシーを備えるかについて学んだ。

PYは、批判的思考、プレゼンテーション、ディスカッションのスキルが向上したと述べた。

PYは、DGで得た知識を事後活動に応用したいと述べた。

F. ファシリテーター所感

ファシリテーターとしては二度目であったが、同じテーマを扱ったものの今年度は多くの変更点があった。大事なことなのでここで述べたい。

- 情報とメディアを扱うこのDGは、満足に進めることができた。内閣府と共にチームを作り、PYが乗船した際に情報とメディアについて予習ができているように沢山の事前課題が出された。情報とメディアというテーマは、PYにとって慣れ親しんだものに思えるが、このテーマ名は誤解を招くものであったかもしれない。ファシリテーターは、議論に市民ジャーナリズムや戦略的マネジメントを組み込んでいたが、テーマはメディアリテラシーに焦点を当てており、多くのPYは、メディア・マネジメントの手法についての知識を得ることを期待していた。そうではあったが、PYは非常にエネルギーに溢れ、学びがっていた。議論における意見、創造性、批判的思

考から、PYの学びが見て取れた。最後には、PYはメディアリテラシーと積極的なメディア・ユーザーの実質をつかんでいた。ディスカッション活動はSSEAYPにおける核となる活動であるため、毎回、PYに対してDGの目的を伝えた。ファシリテーターとしては、メディアに対して知っていたり、知らなかったりと、異なる背景を持つPYに向けて学習の土台を作り上げることは至難の業だった。学びを盛り上げるため、ファシリテーターは毎回アクティブラーニングの技術を用いて、PYが（枠組みの中もしくはファシリテーターの指導の下）自発的に知識を得て、その後その知識を発信し、結論を出すということを行った。幸いなことに、乗船前までの様々な準備があったにもかかわらず、PYは事前課題を意識してしてくれた。そのため、情報とメディアについて創造的・批判的に議論することができ、テーマを成功裏に収めることに繋がった。

- DG Dayも大変であった。ファシリテーターは、PYが知識と決意を確認することができるようを手助けた。PYは、熱意をもって成果をエデュテイメントの手法でもたらした。旧来的ではないプレゼンテーションからは、PYがグループテーマについてきちんと理解し、創造的で魅力的に自らの理解を解釈して形にできることが見て取れた。ここでは、PYの知識の集大成を見ることができた。
- 今年度は、事後活動についてファシリテーターが管轄することになった初めての年である。前例のない中、ファシリテーターのチームは事後活動の企画と実行について、説明とワークショップの双方で一生懸命に取り組んだ。そしてファシリテーターたちは、各国での全ての事後活動についてプロジェクト・マネジメント構造を強化すべく事後活動セッションについて討論と協議を行った。加えて、今年度は本事業のネットワークを強化する個人単位の事後活動を促進するためにPYによる取組の紹介を推奨する試みを始めて行った。全体に向けた事後活動の発表はとても立派であった。ただし、進捗の評価が多くのプロジェクトについてなされることになっている。
- 最後に、DGの素晴らしい成果に対するご支援とご協力に対し、内閣府、日本青年国際交流機構、NL、本事業の各国事後活動組織、そしてPYに感謝申し上げたい。また、DGのために一致団結して臨んだファシリテーター全員と、この喜ばしい成果を分かち合いたい。皆さんと共に仕事をしていくことができて光栄であった。これを、私のファシリテーターとしての総括に代えさせていただきたい。

(8) ソフト・パワーと青年の外交グループ

PY：36名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

「ソフト・パワー」とは、軍事力や経済力といったハード・パワーとは異なり、自らの文化や価値観について他者から支援や共感を勝ち得ることにより、国際社会において信頼を得たり自己の影響を強めたりする力と定義される。自国の文化や価値観の強みや魅力を見出し、また、ソフト・パワーを携えて国際社会に参画する上で、青年にどのような貢献ができるのかを議論する。

b. 期待される効果

- ・ 事後活動を準備・実行する上で、戦略的にソフト・パワー及び広報文化外交を活用する。
- ・ 他国によるソフト・パワー外交の恣意を分析・評価できる能力を身につける。
- ・ 青年大使・未来のリーダーとして、自らの国益を代表することに自信を持つ。

c. 身につく能力

知識

- ・ 外交がいかに他国の人々の行動に与えるか、その影響についてより関心を強くする。
- ・ 外交の世界における「ハード・パワー、ソフト・パワー」、及び国際関係におけるそれらの役割について基本的な理解を得る。
- ・ 国家によって成功裏に行われたソフト・パワー外交・戦略とその成果について知識を得る。

スキル

- ・ プレゼンテーション・スキル：効果的な意見の伝達方法
- ・ チームビルディング及び外交的なスキル：共通もしくは歩み寄れる点を探る方法
- ・ プラットフォームを自らが提供することでルール・メーカーとなり、グループをリードしていく能力

行動

- ・ 人前で自信を持って自らの考えや意見を述べる
- ・ 自国の強みを理解することで、自国を代表できる
- ・ 積極的にまた自信を持って自らの信念を伝える
- ・ 胸を張って社会を変える一員となる

B. 事前課題

個人課題 1

ジョセフ・ナイ『ソフト・パワー：21世紀国際政治を制する見えざる力』第1章を読了後、レポートを提出すること（200～300ワード）

この課題によって、PYは外交におけるパワーについての基礎的な知識を得た。また、本書はDGの全セッ

ションを通じた基礎的な知識となった。

個人課題 2

「私に影響したソフト・パワー」と題した2分間のプレゼンテーション作成

PYは、過去に自分に影響を与えたソフト・パワーのコンテンツ（他国のアニメ・映画・小説など）を説明する持参物が求められ、そのコンテンツに関する2分間のプレゼンテーションが求められた。このプレゼンテーションは、コンテンツの作成元となった国に対しての自分の見方がいかに変わったかに言及することで、どのようにソフト・パワーが自らに影響したかを説明するものである。

国別課題 1

「なぜSSEAYPは、ソフト・パワー外交として成功（又は失敗）しているか」についての3分間のプレゼンテーション作成

SSEAYPが、いかに日本及びASEAN各国における未来のリーダーの育成に成功・失敗したかについて調査・発表すること。事後活動組織と連絡を取り、既参加青年とその個人及び事後活動組織としての事業後の活動について調査し、本事業の成果について評価すること。

国別課題 2

他の参加国のPYが自国のファンになるような3～5分間のプレゼンテーションを任意の形態（パワーポイント、動画、歌など）で作成すること。どのような切り口（例：文化、食、歴史、伝統、観光地）で国を紹介するかは、自ら選択できることとする。画像や映像を含め、他者により作成・撮影・編集されたコンテンツを使用してはならず、全てオリジナルであることが求められる。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設：一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）

活動

- GiFTスタッフによるプレゼンテーション
- SDGsカードゲーム

視察から学んだこと

- PYは、GiFTが青年の社会参加及び青年がより良い社会を作り上げるに際し協働することを促進する上で、SSEAYPとほとんど同じ価値観を持っていることが、このプレゼンテーションで分かった。
- カードゲームを通して、PYたちはコミュニティの持つ考え方を考えることにより成果が変わり、関係者内でのルールや思考を決めることの重要性を理解した。

グループ・ディスカッションI

ねらい

- 広報文化外交の観点から、東京での課題別視察の振り返りを行う。
- 外交の目的について理解する。外交における主要なアクターやツールについてよく理解する。
- 外交におけるソフト・パワーの役割について理解する。

活動

- ファシリテーターによる講義「なぜ私は外交の世界に入ったのか」
- 日本での課題別視察について振り返り
- グループ・ディスカッション
 - どうして内閣府はGiFTを課題別視察先にしたのだろうか。
 - 外交の目的とは何か。成功したと呼べる外交の成果とは、どのようなものであるべきか。
 - 外交の世界においてどのようなツールが用いられ得るのか。
 - 外交の世界におけるソフト・パワーの役割とは何か。

成果

PYは、GiFTでの課題別視察において何を学んだかを共有し、またどうしてGiFTが内閣府によって視察先に選ばれたのかを批判的に考えた。6つの班に分かれて、内閣府がこのDGの視察先としてGiFTを選択したことにつき考えられる動機や意図を議論した。主なものとして挙げた一つに、GiFTの創設者の多くが「世界青年の船」事業及びSSEAYPの既参加青年から成るということがある。これにより、PYたちに対して影響を与えて、事後活動についての見方の幅を広げ、自分たちが社会や世界に対してインパクトを残せるという自信や信念を強めさせることができたのではない。

また、外交の目的についての議論も行われた。これは、外交の重要性及び各国がいかに自らの目的を達成するために外交を用いるかを理解する時間となった。この議論を通じて、PYは外交の最も重要な目的は国益の最大化であることを学んだ。さらにPYは、どの国も外交に用い得るツールについて議論を行い、ソフト・パワーとハード・パワーの2種類に大別した。

その上で、PYはソフト・パワーの定義について話し合い、ソフト・パワーとは自分の価値観に他者を共感させ、コミュニティとして共有する目的を自分が達成する上で自発的に協力させ、魅力的に見せる力であると学んだ。そして、ソフト・パワーは、説得したり言葉を尽くしたりして他者を動かすというそれだけでも重要な力ではあるのだが、単にそういうことだけではなく、他者を惹きつける力であり、それは往々にして他者から同意を引き出すことに繋がる。つまり、行動としてはソフト・パワーとは惹きつける力であり、リソースという観点からみると、ソフト・パワーのリソースとは、そのような

魅力を生成する資産のことである。

グループ・ディスカッションII

ねらい

- ソフト・パワーがいかに人々の行動や思考に影響し得るかを理解する。
- どうしてソフト・パワーが外交の世界において有力なものとなったかを理解する。
- 各国のソフト・パワーとして、どのようなものが活用できると思うかアイデアを共有する。

活動

- 前回の復習：前回のセッションで何を学んだかをグループで共有する。
- ソフト・パワーについてのファシリテーターによる講義「ソフト・パワーという概念はどこから来たか：外交の技術」
- 国別課題2の発表

成果

ファシリテーターによる講義はPYにとって新鮮で、いかにソフト・パワーが外交の世界において有力なものとなり、またその背景にあった意図はどのようなものだったかを学ぶ機会となった。PYはまた、「ソフト・パワー」がどのようにして外交の世界において学術用語として定着し、外交ツールの標準となったかを学んだ。ファシリテーターはさらに、世界の成功したソフト・パワーを活用した外交戦略を紹介し、その成果と効果について説明した。その後、「外交」と「青年外交」の違いを議論し、自分たちがいかに社会の変化を生み出すことができるかについて理解を深めた。

ディスカッション後、PYは、自国の魅力を他の参加国のPYがファンになるように伝えることを目的としたプレゼンテーションを国別に行った。これを通じて、PYは各国が持つソフト・パワーについて学ぶとともに、自国の魅力について改めて理解する機会となった。また、発表における効果的なメッセージの伝達方法についても学習した。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- 外交のツールとしての、情報の重要性を理解する。
- 情報には隠れたメッセージが含まれている可能性があることを理解し、それを分析することの重要性を理解する。
- 外交のツールとしていかにSSEAYPが運営されてきたか、またそのソフト・パワーとしての役割について理解する。

活動

- 前回の復習
- ファシリテーターによるプレゼンテーション：外交

のツールとしての「情報」

c. 国別課題1のプレゼンテーション

- d. 議論：SSEAYPがいかにかソフト・パワーとしての役割を果たしているか

成果

セッション冒頭にて、いかに情報が外交のツールとして用いられているかについての動画を視聴し、PYは、情報がどのようにして人のものの見方や考え方に影響するかを学んだ。情報は時として政策に対してまでも多大な影響を与えるプロパガンダとなり得る。PYはまた、様々な情報に触れた際、その与えられた情報に対し慎重でいるべきであり、それらを精査し、その奥に隠れたメッセージや意図を読み取ろうとすることが重要であると学んだ。

それに続いて、国別で「なぜSSEAYPはソフト・パワー外交として成功（又は失敗）しているのか」というテーマでのプレゼンテーションが行われた。全ての参加国とPYは、SSEAYPは未来のリーダーの育成に資する事業であり、本プラットフォームを提供することで参加者に対して大きな影響をもたらす非常に成功した事業だという点で意見が一致した。そしてPYは、全員が本事業に魅力を感じ、参加した時点から、事業の目的達成のための一員となり、参加国、特に主催国の大ファンになったと合意した。

ベトナムにおける課題別視察

施設：ホーチミン市経済金融大学

活動

- a. 本学教授による講義
b. 地元学生とのグループ・ディスカッション及び、その成果についてのプレゼンテーション
c. キャンパスツアー

視察から学んだこと

議論を通じて、PYは地元青年たちがソフト・パワーについて異なる理論を持っていることを知り、船内で得たアイデアや知識を共有する機会を得た。また、地元青年たちに対して意見を尋ね、うまく両者の意見を統合することで、議論や、プレゼンテーションの準備に対するファシリテートの一助となることもできた。そしてこうした活動を通じて互いの関係性を深めることができた。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

- a. ベトナムにおける課題別視察の振り返り
b. 学習者から実践者となるべく、学んだ内容に基づいて行動に移し出すためのDGとしての事後活動候補について議論する。
c. 要人からのメッセージを受け、PYが世界の希望・期待であるということを理解する。

- d. 12月5日の成果発表についての計画を立てる。

活動

- a. プレゼンテーションの準備
b. 要人からのビデオメッセージ視聴
c. 議論：DG8の成果（事後活動）は、どのようなものであるべきか。

成果

このセッションでの主な活動は、DGとしての事後活動の計画を議論することであった。PYは6つの班に分かれ、これまでのセッションから何を学んだか、またそれらをどう活用できるかを議論した。各班とも事後活動候補についてプレゼンテーションを行い、DG8としてではなく第46回SSEAYPに参加した青年全体としての「ディスカッション活動共同声明」の作成に取り掛かることで合意した。というのも、ソフト・パワーとはプラットフォームを作ることであり、他者に自らの価値観を魅力的に感じさせ、共有する目的を自分が達成することをコミュニティが支援したくなるように行動させることだからである。そこで、PYは、この共同声明が事業全体の成果として支持され発表されるようにするための戦略立案に取り掛かった。一部のPYは、このためのチームを組成して共同声明の中身を起草し、他のPYは、この運動を船内の全PYに広める外交官としての役割を担った。

グループ・ディスカッションV

ねらい

- a. 国旗の重要性を理解する。
b. シンガポールにおける訪問国活動の背景にあるメッセージを理解する
c. プレゼンテーションの準備

活動

- a. 議論：国旗の意味と役割
b. 議論：シンガポールにおける訪問国活動の主たるメッセージは何であったか。
c. 成果発表会の準備
d. PYによる共同声明の準備

成果

セッションの冒頭、PYは6つの班に分かれ、各国の国旗について議論した。PYには、国旗の意味、そして国旗についてどのような気持ちを有するかについて議論することが課せられた。議論の結果についての共有がなされた後、ファシリテーターは国旗が国家そのもののみならずその歴史や国民の誇りを代表していること、そして国旗が最上の敬意を以て扱われる必要があることを説明した。

その後、PYは、シンガポールにおける訪問国活動で見聞きしたこと、特にシンガポールが2つの港（海の港及び空港（エアポート））への視察を組み入れた理由に

ついて議論を行った。シンガポールの主たる収入源は通商によるものであり、シンガポールがこの領域を非常に真面目に扱っており、港において国益をどのように保つかを見せたかったのだと、PYは理解した。一部の班は、東南アジア地域をけん引する国となるべく、シンガポールは港や空港における基準を設定しようとしていると指摘した。

D. ファシリテーター所感

今回、このセッションを受け持つにあたり、最も意識したことは、このDGが単に知識を身につけるだけでなく、少しでも彼らの実践に結びつく経験をさせるということであった。また、知識も一方的に教えるのではなく、青年一人ひとりが持つ考えや経験を相互に共有することで、この場、このメンバーでしか生み出すことのできない学びを提供したいと考えていた。青年たちは多様な環境から集められていることもあり、一つの問いを投げればそれを自ら理解し考えや思いを共有し、自習自得する姿を多く目の当たりにした。

何よりも驚いたのは、この数回しかないセッションでの学びを活かし、船内で実際に実践を行うことを決め、成功裏に納めたことであった。

ソフト・パワーと聞くと多くの人はハリウッドやコカ・コーラに代表されるような文化として他の人々に良い印象を与える外交戦略と捉えられることが多い中、青年たちはソフト・パワーを「自らが決めたルールやプラットフォームに多くの人々を参画させ、そのイニシアチブを魅力的に感じさせ能動的にこちらの仲間とすること」と定義し、青年としての共同声明を作ることを決め

た。この共同声明は企画から共有、そして発表までDG内で作業が行われたが、彼らはこの成果を事業全体の成果として受け入れられることを目標に、自らの成果であることを明らかにせず、各々が各関係者にアプローチしてより多くの賛同者が得られるようにと船内において外交活動を展開した。

また、自らがリードを取りつつも誰もが納得でき、受け入れられる内容にすべく、全PYが文面の作成に協力できる仕組みを考え、計6度以上の改定を経て完成に至った。その結果、乗船していた全ファシリテーターだけでなく、管理部の上層部にも受け入れられるという実績を残すこととなった。

この共同声明は、12月5日に開催された成果発表会の総括として会の最後に発表され、日の目を浴びるとともに、本DGだけでなく他のDGのPYも署名し、第46回SSEAYP全体の成果の一つとして発表された。

青年たちはこの活動の最終目標を「自らがプラットフォームを提供し、ルールを決めた上で、より多くの関係者とこの価値を共有すること」と定め、全体の前で共有されるという成功を収めたのちも、この成功がDG8のものであったことを伝えることなく、自らが定めた最終目標の達成者として船を降り各国に帰っていった。

この学びをすぐに実践に生かし、目標を達成するという彼らの姿に私自身が感銘を受け、勇気づけられるとともに、彼らが今後未来のリーダーとして各国・地域でこの様な成功体験を積み重ねることにより良いリーダーになるとともに、この事業の価値が確実に世界へと広まっていくことを確信した。

(9) 青年の起業グループ

PY: 36名

A. グループ・テーマ・インフォメーション

a. テーマ概要

日本とASEAN各国における社会とビジネスの関係や現状を理解し、その上で、社会及び経済を活性化する点から、社会としてどのような取組が必要か、また、青年自身もどのように取り組むことができるかについて議論する。

b. 期待される成果

- ・ 起業環境が活況を呈することが経済や社会に対して持つ重要性や影響について正しく理解、認識する。
- ・ 青年の起業が盛んになるよう促す、社会における条件、環境や要素について学び、認識する。

c. 身につく能力

知識

- ・ 起業と社会及び経済との関係性
- ・ 青年起業家やその事業が直面する課題
- ・ 青年の起業や事業一般における内的及び外的な成功要因

スキル

- ・ マネジメント及び他者と協働するスキル
- ・ 批判的思考及び推論のスキル
- ・ プレゼンテーション及びコミュニケーションのスキル

行動

- ・ 自らの決定や行動、その結果に対する責任
- ・ 個人的、プロフェッショナルの、そして社会的な認知

B. 事前課題

個人課題 1

課題図書：

- 起業家の行為とは何かを定義する（論文）
- 起業家精神及び経済成長の分類（論文）
- 起業に関連した、国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）についての記事

個人課題 2

自国で成功している青年起業家を探し、インタビューを行う。

国別課題 1

社会や経済に対して良い影響を与えた地域の企業や事業の例、また悪い影響を与えた例について調査する。

国別課題 2

自国において、起業家や起業的活動の支援を行っている著名人もしくは規模の大きい非政府組織（NGO）、そして主要な政府組織について調査やインタビューを行う。

C. 活動内容

日本における課題別視察

施設 1：株式会社LORANS.

活動

- 福寿満希代表取締役から社会起業家としての来歴に関するプレゼンテーションをしていただき、また同社をどのように立ち上げ、運営し、成長させたのかについてもお話いただいた。
- 障害を持った従業員の管理や、安全で生産的な労働環境の作り上げることについて、小さな班に分かれて議論を行った。

視察から学んだこと

- 障害を抱える従業員と効果的に仕事を行う上では、ただ一般的な施策を導入するというよりも、互いに尊重し合うことやチームメンバーの強みを理解しようとするのが一番である。
- 労働環境が肝要である。ただ単にビジネスのことだけではなく、障害を抱える方々に対して就業機会と安全な労働環境を提供することも大切なことである。

施設 2：BOUNDLESS Inc.

活動

- 同社についての説明と、減少していく自治体についてのプレゼンテーション。
- 地方創生の課題とその対策について、小さな班に分かれの議論及びグループワーク。

視察から学んだこと

- 問題の真因が何であるか。
- 地方の持続可能性が持つ性質。
- 地方創生のための新しい見方や考え。

グループ・ディスカッション I

ねらい

起業が社会や経済に対して持つ重要性や影響について理解する。

活動

- PYの起業家精神に対する理解度を測る「語彙・語句」についての活動
- 小さな班に分かれての議論及び起業家精神の功罪についてのロールプレイを通じて得られた結果に関するプレゼンテーション。

成果

- PYはファシリテーターと共に、本DGにおける起業家精神の定義づけを行い、意見を一致させた。
- 起業家精神についての異なる功罪に関し考察し、理解した。
 - 良い面：経済発展、雇用機会の創出、市場拡大による国際的な影響の可能性、技術の進歩による利便性の向上、情報スキルや知識の普及や向上、起業家の個人的成長
 - 悪い面：地域の小規模事業者に不利な影響を与え得る、環境への悪影響、公衆衛生への悪影響、きちんとした管理がなされていない企業による景気への悪影響の可能性、起業の成功率の低さに起因する資源の無駄遣い

グループ・ディスカッション II

ねらい

- 青年起業家の抱える苦悶や課題について知り、学ぶ。
- 青年の起業が成功や失敗する上で影響する内的・外的の様々な要素を見つける。

活動

- 小さな班に分かれて、自身が起業家であるPYが、そうでないPYに対して、起業家としてのこれまでの道程や、直面した課題について共有を行った。
- 小さな班に分かれての議論や「ワールドカフェ」形式での共有を通して、青年の起業が成功や失敗する上で影響する内的・外的の様々な要素について議論した。

成果

- 起業家ではないPYは、青年起業家が直面する課題や壁について、起業家であるPYから直接学んだ。これによって、青年起業家に求められる事柄についての共感や理解が深められた。
- 青年起業家の成功に寄与する（内的及び外的な）要素について認識した。例えば、自己の内発的動機について知ること、知機や知恵、創造性や革新的であること、人脈、周囲からの支援、相談・指導などである。
- 青年起業家の失敗に繋がる（内的及び外的な）要素

について認識した。例えば、すぐに満足してしまう、打たれ弱く忍耐強くない、あれもこれも足りないという考え方、若気の至り、外部の支援体制の不存在又は不足、ロールモデルの欠如などである。

グループ・ディスカッションIII

ねらい

- a. 青年の起業が盛り上がるよう促したり支援したりする望ましい環境が持つ要素には何があるか理解する。
- b. 企業あるいは事業の成功や失敗に影響する様々な内的及び外的要素には何があるかを認識する。(その1)

活動

- a. PYは、小さな班に分かれてシミュレーションを行う。各班は架空の「国家」となり、各「政府」は青年の起業を盛り上げるのを支援・助成する理想の「政府機関」を立てる。
- b. PYは、小さな班に分かれて、シナリオに基づいた課題を解く。異なる成長段階にある企業についての3つの異なるシナリオが与えられるが、それらの問題についての解決策を考え出す。

成果

- a. PYは、創造性を発揮し、前回までに得た学びを活かし、それぞれの構想した「政府機関」において、青年の起業を盛り上げるに資する要素が表されていた。
- b. 与えられたシナリオに基づき、異なるタイプの企業が抱える問題を特定し、その主要な解決策を立案した。
 - ・ シナリオ1：成長のための新規事業アイデアを効果測定する。
解決策：事業開始前に7Pのフレームワークを適用し、市場調査を行い、革新的な姿勢により一般的でない角度から事業を設定する、事業成功のために技術と人脈を有効活用する。
 - ・ シナリオ2：予算内で新規ソフトウェア製品のマーケティングを行う。
解決策：オンラインプラットフォームを通じて同製品のヨガ事業者への販促を行う。直販する。無料試用という方法で消費者の関心を集め、サービスの顧客満足度向上策に続ける。
 - ・ シナリオ3：創業5年の企業の停滞した売上を向上させる。
解決策：新しい想定顧客を設定して事業のリブランディングを行う。新製品開発、マーケティングへの注力を増やす。

ベトナムにおける課題別視察

施設：サイゴン・イノベーションHUB

活動

- a. 現地の起業家による同地でのスタートアップ・エコシステムについてのプレゼンテーション

- b. PYは、4つの班に分かれ、現地の起業家たちとそれぞれ異なるトピックについて議論した。その後、各班は議論における発見や結論について発表した。

- c. 同施設についての質疑応答

視察から学んだこと

- a. ベトナム及びASEANにおけるスタートアップ・エコシステムについての知見
- b. PYは、ASEANの起業ブーム、社会的起業、革新的な起業、そして起業教育について学んだ。

グループ・ディスカッションIV

ねらい

企業あるいは事業の成功や失敗に影響する様々な内的及び外的要素には何があるかを認識する。(その2)

活動

- a. 小さな班に分かれて、企業の成功や失敗に影響する内的及び外的要素について議論と共有を行った。
- b. PYは、ファシリテーターと共に、ビジネスと起業家精神の違いについて議論した。

成果

- a. 企業の成功に寄与する（内的及び外的）要素について認識した。
例としては、きちんと計画された事業運営や財務制度、最適なマーケティング及び販売戦略、明確な目標や目的、良質なチームワーク、人口統計上の有利さ、メンターシップ及び人脈、周期的に訪れる有利さ、政府の支援などが挙げられる。
- b. 企業の失敗に繋がる（内的及び外的）要素について認識した。
例としては、市場の理解不足、低品質な製品及びサービス、技術力の欠如、資産や資金の欠如、自然災害、材料不足、飽和市場、政情不安などが挙げられる。
- c. PYは、ビジネスとは売ることにより重きが置かれているが、起業家精神には革新的であることや常に他の事業と差別化するという志向がみられると学んだ。

グループ・ディスカッションV

ねらい

これまでの議論を通じて気づきや得たものを、日本及びASEANにおける現実世界に当てはめる。

活動

PYは、参加国ごとに分けられ、「ハッカソン」として、自国や各自のコミュニティにおける青年の起業を盛り上げたり促進したりするためのアイデアを概念化、計画、発表した。

成果

PYは、実現可能で、現実のニーズや既存のサービスでは満たされていない点に対応したアイデアや計画を立て

案した。また、各案では、これまでの議論における気づきや結論を効果的に適用していたことから、本ディスカッション活動の内容を総合的に理解したことがうかがい知ることができた。

実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション ねらい

- 個人及びグループでのプレゼンテーション・スキルをかん養する。
- コミュニケーション・スキルを伸ばし、簡潔で明快に考えを発表する。
- 考えを発表したり、少人数の議論に参加したりすることへの自信を深める。

活動

- いくつかの班別による議論を通じて、自らの考えや意見を述べる経験を重ねた。
- 議論の結論を口頭、またロールプレイで発表する経験を積んだ。
- 短時間で、議論の結論をまとめ、プレゼンテーションを行った。

成果

- ディスカッションの場を通じて、PYは積極的に班別の議論に加わった。
- 議論の結論を個人もしくは班として積極的に発表し、メッセージを効果的に伝えるための様々なテクニックを学んだ。
- 短時間でプレゼンテーションの準備をするスキルを伸ばし、議論の結論をプレゼンテーションするための様々な手法を経験した。

D. 決意・期待される今後の活動

- 参加国ごとに、自国における事後活動計画を起案した。
- 各々の起業家的挑戦を相互支援するためのネットワーク・グループを構成したPYもいた。

E. 評価・反省（自己評価セッション）

ディスカッションの初回で、PYはディスカッション活動における個人の目標や期待を書き出しており、それらが自己評価や振り返りのために返却された。

- ディスカッション活動について自らが設定した個人目標を達成できたと思ったPYは少数であった。
- 大半のPYは個人目標の達成度が50%以上だと感じた。
- 個人目標の達成度が50%以下だと感じたPYは数名いたが、ディスカッション活動の問題というより個人的な理由によるものだという。
- 何らの個人目標も達成できなかったと感じたPYはいなかった。

F. ファシリテーター所感

DG9への参加度合い

ディスカッション活動の内容に非常に前のめりに参加していた。PYはきちんと議論に加わり、それは常に活発で比較的広範に及んだ。

さらに、DG9におけるPYのレベルの高さには目を見張るものがあった。ディスカッションの時間で学び、互いに共有し合う強い情熱がみられた。そして付加的な仕事に対しても臆することなく、ディスカッション・セッションやプログラム全般における諸作業を手伝ってくれる者を募った際はいつでも非常に主体性をもって取り組んでくれた。

また、自主活動を企画して社会的起業に興味がある他のPYを集めた者までも見られた。その目的は、第46回SSEAYPにおける社会的起業家のネットワークを組織して、相互に支援し合うというものだ。こうした程度の高い主体性は、実に称賛に値する。

このように、非常に、青年の起業のファシリテーター冥利に尽きた。この場を借りてDG9の全PYがディスカッション活動において価値ある経験を与えてくれたことに対して心からの感謝を述べたい。

社会的活動の手段としてのアントレプレナーシップ

他のDGを含めて多くのPYと話す中で、青年の起業というトピックは、ディスカッション活動においてより強調して取り扱われ得ることがはっきりと分かった。各種の社会問題や社会活動に情熱を傾けていながら、起業、特に社会的起業について多くの質問を持つPYと話をした。というのも、こうしたPYは、起業を自らの社会的活動を実現・継続することが可能な現実性のあるものだと捉えているからである。

このことから、本トピックは、起業の促進や自らが起業家になることに興味があるPYだけに関係してくるのではなく、自らが関心を寄せる社会問題について活動家であることに真剣であり、さらに効果的で、高効率に、持続可能にそうありたいというPYにも大いに関係してくる。

そこで、私は一つの提案をしてみたい。このディスカッション活動（そしてSSEAYP全般）が今日の世界に對峙し、若い変革者が生まれるのを助け、現実的で目に見える建設的な影響を市民社会に生み出すことを促すプラットフォームであり続けたいと欲するならば、全てのPYに対して起業家精神のトレーニング内容を組み込む必要があるのではないだろうか。

結語

再びSSEAYPのディスカッション活動においてファシリテーターとなれたのは、私にとって実に名誉で光栄なことであった。個人的には、この経験はこの上なく豊かで幸せなものである、と率直に思う。

第46回SSEAYPのディスカッション・ファシリテーターの一人として選んでいただいたことにつき、内閣府

に対して、心からの感謝を申し上げたい。また、私を支えていただき、ディスカッション活動を成功裏に終えることに尽力いただいた全ての方々、特に管理部員の皆

様、そしてもちろんのことだが同僚のファシリテーターたちに深謝する次第である。

3 ディスカッション活動参加青年共同声明

- (1) 令和元年10月25日から12月13日まで実施された第46回「東南アジア青年の船」事業参加青年一同は、ASEAN加盟国と日本の人と人との交流の促進と、未来のリーダー育成の観点から、本事業を継続することの重要性を改めて発表する。
- (2) 我々は、東南アジアと日本の青年たちとの、深く暖かい絆を強める場となっている本事業の重要性を強調したい。昭和49年度の事業開始以来、本事業はASEAN加盟国と日本の未来のリーダーとなり得る青年たちに数えきれないほどの学びの機会を提供している。本事業は日本政府が、7億人近い人々が住み一大経済圏となっているASEAN加盟国との永続的な関係を構築する親善事業であるため、今後も継続すべきである。
- (3) 我々は、本事業の核となる目的である「若きリーダーによる明るく比類無き次世代の構築」を体現している既参加青年による様々な成果や進歩を誇らしく思う。既参加青年が本事業を通じて得たことは、彼らに政策立案者、起業家及びソーシャルワーカーといった、国家のみならず世界をリードする決断や行動をする人々になる可能性を与えている。彼らの成功は当事業の成功でもある。
- (4) 本事業に参加することは、単なる船内での生活を体験することにとどまらない。日本を含めた各訪問国で多様な文化に触れ、様々な体験をしながら、各参加青年がより良い世界を作るための努力や思いやりを持つ。事業終了後、参加青年は地域社会での活動やボランティア活動など、参加国単位でプロジェクトを企画し実施することとしており、これらのプロジェクトは以下の分野にフォーカスしたディスカッション活動の成果の賜物である。
- a. 将来の持続可能な開発を目的とした環境中心のアプローチを通じて、災害リスク軽減に対する関心を高めること
 - b. 社会的包摂、多様性、メンタルヘルス及びウェルビーイングを促進するとともに、誰もが質の高い教育を受けることを可能にすること
 - c. ワーク・ライフ・バランスを進めつつ、青年の起業家精神を醸成すること
 - d. 市民ジャーナリストとしてフェイクニュースを見極め、回避できるよう、メディアリテラシーを高めること
 - e. 参加青年たちが社会課題に向き合い、生涯を通じた志を立て、より良い社会の構築に貢献し、リーダーとしての役割を全うできるよう後押しすること
- (5) 我々はASEAN加盟国及び日本が長年にわたり本事業継続のために努力を重ねてきたことに敬意を表する。継続的な支援により、参加青年たちの潜在能力は開花した。この事業から参加青年が自国に持ち帰るのは、学術的知見（知識）だけではない。事業期間を通して築いた思い出や人との絆もある。世の中で最も重要な投資は人材に対する投資であり、これこそ、ASEAN加盟国及び日本が過去数十年間にわたり重視してきたものである。
- (6) 我々は、ASEAN加盟国及び日本国政府が、より多くの青年が本事業に参加したくなるような方法・手段を提供し、本事業への支援を継続することを応援する。これに関連し、各国事後活動組織も各国政府が本事業を推進する際の主な賛同者、アドバイザーとしての役割を継続することとなる。

4 帰国報告会（事後活動提案）

（1）概要

12月12日、にっぽん丸船内ドルフィンホールにて帰国報告会が開催され、各国及び個人の事後活動についての活動案を発表し、共有した。PYは、第46回SSEAYPを通して学んだことを最大限にいかし、社会に貢献していくための第一歩としてこれらの活動案を考案した。

- 16:00-17:15 国ごとの発表
- 17:15-17:30 個人の発表

（2）各国事後活動提案

A. 日本

プロジェクトTOUCHは、15～18歳の高校生を対象とし、グローバルリーダーになる将来性を向上するための機会を提供するものである。日本における地方の高校生は、多様な文化について視野を広めるための情報にアクセスしにくい状況にある。この課題に気づき、日本PYは、日本に存在する様々な文化及び多文化共生社会についての意識を向上するため、高校で文化に触れるセッションを開催することとした。

プロジェクト名：TOUCH（TO Understand Culture from the Heart：文化を心から理解する）

背景：

- 研修生、学生、観光客など、外国人数の増加
- 異文化理解の欠如のためのトラブル
- 多様な文化に触れ、学ぶ機会の不足

目標：宗教、習慣、言語を基盤とした異文化理解を促進し、多文化共生社会を構築すること

対象：

- 高校生（15～18歳）
 - 将来のリーダー
 - 柔軟な考え
 - 地元とのコネクション
 - この課題にあまり関心のない人にアプローチ
 - 保護者への影響
- 日本全国の高等学校約15校
 - 例：山形県、茨城県、東京都、大阪府、広島県
- 1回当たり100～150名の生徒

内容：

- 海外から日本に移住した人を招待
- 講演、ゲーム、交流活動を通じた文化交流
- 海外での日常生活について映像、写真、物語で学習
- 日本国内や外国における多様性を理解するためのQ & Aセッション
- 生徒の意識を測定するための事前と事後の評価を実施

期待される効果：

- 視野を広げ、異なる文化に関心を持つ
- 自身の観点で批判してはならないことを理解する
- 日本に存在する様々な文化について意識を向上する
- 多文化共生社会を確立するために積極的な行動を取る

タイムライン：

- 2019年12月：詳細の計画、高校やパートナーのリスト作成
- 2020年1月：高校やパートナーに連絡、交渉
- 2020年2月：実施スケジュールの決定
- 2020年3月：実施準備
- 2020年4～7月：プロジェクト実施及びフィードバックを基にした改善

B. ベトナム

山間部における衛生に関する課題を解決するために、ベトナムPYによるプロジェクトは、学校に衛生的なトイレを設置することと並行して、手洗いと節水の必要性を教師や生徒に伝える教育活動を行う。本プロジェクトは、今後の発展と持続性のために、公的及び民間の様々な関係者を巻き込む予定である。

プロジェクト名：ベトナム北部の山間部に暮らす子供たちの衛生教育

背景：

- 内部の力：ベトナムPYの背景
- 現状：都市部と地方の格差及び知識の欠如
- SSEAYPでの経験：プロジェクト・マネジメントとプロジェクト実施

第一回目のプロジェクトの実施場所：ソンラ省ヴァンホ区ムオンメン村の学校

目標：

- 300名の児童・生徒（6～14歳）が、口腔及び手指衛生と節水に関する知識を得る
- 学校に衛生的なトイレを提供する
- 持続可能なプロジェクトにするために、教師と生徒のための教育資材と技術を引き渡す

タイムライン：

- SSEAYP前：案出し、資金調達、現場確認、送金
- SSEAYP中：企画案の調整と完成
- 2019年12月15日：プロジェクト実施
- 2020年3月：評価

期待される効果：

- 小中学生：手指と口腔衛生
- 中学生：節水
- 教師：知識と技術の共有

関係機関及び連携先：

- ・ ホーチミン共産青年同盟
 - 中枢管理レベルからのサポート
 - 更なる関係構築や他の関係者へのつながりの元
- ・ 各地域の青年同盟
 - ニーズを理解し、地域レベルで学校への連絡の手助け
 - 現場での召集やファシリテーションの手伝い
- ・ 地域の各学校
 - 関係者：校長、教師、スタッフ、生徒
 - 学びを得られるよう、そして声を上げられるように対象者を導く
 - 現場での召集やファシリテーションの手伝い
- ・ スポンサー
 - 有形のもの（金銭、商品、サービスなど）と無形のもの（知識、サポート、関係性など）をプロジェクトに提供してくれる企業や団体
 - 将来の更なる関係性や連携

持続可能性：

- ・ このプロジェクトを学校で持続可能にするために
 - 手洗いの歌を教える
 - 正確な手洗いの方法を学校中に貼る
 - 資料管理のための本棚を作る
- ・ このプロジェクトをベトナムで持続可能にするために
 - 資金調達の展開
 - SSEAYPツアー
 - オンラインのプラットフォームを作る

C. シンガポール

シンガポールPYは、シンガポールの青年が、学問的に優れることを重要視し、他の文化に触れ刺激を受ける機会を持たない状況にあることを認識した。このプロジェクトは、様々なコミュニティのパートナーと協働しながら、文化に関する青年の理解を向上し、彼らが情熱を持っていることに取り組むことを後押しすることで、青年をエンパワーするために設立された。

プロジェクト名: Camp Youthnity（キャンプ・ユー（ス）ニティ）

背景：

- ・ 特定された問題：シンガポールの青年の間で、東南アジアや日本の文化の多様性や現在の状況についての認識が低い
- ・ 状況：青年は、学問的に優れることに非常に重点を置いており、文化や時事問題を理解することは優先されていない
- ・ 特定されたコミュニティのニーズ：青年は実際に触れることやロールモデルの存在を通して知ることを動機づけられる必要がある
- ・ パートナーと関係者：学校、社会活動団体や草の根

ネットワーク

目標：

- ・ 東南アジアの国々や日本の豊かな文化に触れたことのない可能性のある青年にSSEAYPでの有意義な経験を共有する
- ・ 異なる背景を持つ青年にとってネットワークづくりの機会とする
- ・ 青年が情熱を持っていることに取り組めるよう鼓舞する

目的：

- ・ ミッション・ステートメント：
 - コミュニティのパートナーと協働し、SSEAYPのポジティブな影響を青年にもたらす
- ・ S.M.A.R.T.ゴール：
 - 50～80名の青年（13～17歳）を対象とした週末キャンプを2020年3月に実施する
 - 参加者の文化理解を、少なくとも30%向上する（事前と事後のクイズで測定）
 - 青年が行動に移し、コミュニティのニーズに対応するためにキャンプ後6か月以内に実施するプロジェクトを提案できるよう力づける

活動：

- ・ 文化理解に関する青年の理解を測るための活動前と後のクイズを実施する
- ・ 共有セッションやゲームなど対話型の学習を行う
- ・ キャンプ期間中、青年と振り返りや共有する会を実施する
- ・ 青年は、情熱を持って行動を起こしたいと思っていることについて表明する
- ・ キャンプで得た知識やスキルをキャンプ後の活動に応用する

期待される効果：

青年は以下のようなキャンプ後の活動を提案することができるよう力づけられる。

- ・ コミュニティのニーズを特定しそれに取り組む
- ・ 青年が文化をより理解する
- ・ 青年の企画力、問題解決力、リーダーシップスキルを強化する
- ・ 連携の継続や案の相互共有を促す

タイムライン：

- ・ 2020年1月31日まで：資金提供とスポンサーになってくれる可能性のあるコミュニティのパートナーを特定しつながる（例、学校、社会活動団体、青年草の根ネットワーク）
- ・ キャンプ開始まで：青年のニーズや関心を知るためにコミュニティパートナーと協議し企画する
- ・ 2020年2月中旬：キャンプ実施場所の確定
- ・ 2020年3月6日まで：必要物資の調達
- ・ 2020年3月中旬：キャンプ

- ・ キャンプ実施後6か月以内：キャンプ後の活動

D. ミャンマー

ミャンマーPYは、学校中退率を下げ、ライフスキル上達のための教育をする。本プロジェクトは、適切な学習環境を整えるために校舎を拡大することと、言語、衛生、道徳的価値観、性と生殖に関する健康、自己啓発に関する技能訓練セッションを企画することを提案する。

プロジェクト名：Project Goodwill 2.0（プロジェクト・グッドウィル2.0）

背景：

- ・ バガンのPhwar Saw村に位置
- ・ 公立学校
- ・ 現時点では小学校
- ・ 校舎建設のための費用が不足
- ・ 近隣4つの村の生徒から必要とされている

目標：

- ・ Phwar Saw地域の生徒が基礎教育を終了することができるようにする
- ・ 高校の延長授業やカリキュラムに対応することができるよう必要不可欠な設備を提供する
- ・ 生徒のライフスキル上達のために教育する

関係者及び関係機関：

- ・ 政府が高校のための先生を配属する
- ・ 第46回SSEAYPのミャンマーPY：プログラムの企画と教育
- ・ UAB（ユナイテッド・アマラ）銀行：資金援助
- ・ 村のコミュニティ：現地でのサポート

対象：

- ・ 一次的対象
 - Phwar Saw地域の生徒
- ・ 二次的対象
 - 村のコミュニティ

内容：

- ・ プロジェクト企画
- ・ 生徒のライフスキル訓練
 - 衛生（小学生）
 - 道徳的価値観（小学校低学年）
 - 性教育と自己形成（小学校高学年）
- ・ 英語訓練コース（パブリック・スピーキングとコミュニケーションスキル）

期待される効果：

- ・ 初等教育から高校に進む際の中退率を減少する
- ・ 子供たちが高等教育を受けられる可能性を上げる
- ・ 村のコミュニティの負担を下げる
- ・ 生徒のライフスキル上達

タイムライン：

- ・ 2020年第1四半期：企画、第一期工事、教育プログラム

- ・ 雨期：工事一旦休止、確認
- ・ 2020年第3四半期：第二期工事、教育プログラム
- ・ 2020年第4四半期：工事完成
- ・ 2021年初旬：新校舎オープニングセレモニー

E. マレーシア

レンゴン渓谷の現状を認識したマレーシアPYは、意識や重要性の認識の向上を図り、コミュニティの課題解決に向けた行動を取ることにした。教育的で起業家的なプログラムを実施し、レンゴン峡谷の地域に有意義な影響を及ぼすために、現地の学生や青年、コミュニティを対象とした様々な活動を行う。

プロジェクト名：「ワリサン・キタ」（私たちの遺産）

背景：

- ・ レンゴン渓谷は、マレー半島における最古の人間生活が発見された場所として知られている。
- ・ 加えて、最大の考古学的発見はペラ・マンである。
- ・ レンゴン峡谷は2012年6月30日にユネスコの世界遺産に登録された。

課題：

- ・ ペラ州レンゴンのコミュニティでは、レンゴン渓谷が世界遺産のひとつとして登録されたことの価値が理解されていない。
- ・ レンゴン渓谷の世界遺産登録に関する知識が低い。
- ・ レンゴンの青年の多くは、雇用機会の限られている地元に残る予定がない。
- ・ 帰属意識が欠如している。
- ・ 破壊行為。

目標：

- ・ ペラ州レンゴンのコミュニティにおいて、世界遺産であるレンゴン峡谷に対する帰属感を植え付ける。
- ・ レンゴンのコミュニティに、レンゴン峡谷の遺産と歴史的遺跡を理解することの重要性についての意識を向上する。
- ・ 起業プログラムを通し、ペラ州のレンゴンにおけるエコ・ツーリズムを促進する。

対象：13～40歳

内容：

- ・ 第46回SSEAYPマレーシアPY
 - 観察：（コミュニティとつながり信頼関係の構築）2020年1月（第1週）
 - 関係づくりと連携（ネットワーキングとマーケティング）2020年1～2月
 - 事後：（KABESAへの文書報告もしくはプレゼンテーション）2020年8～9月
- ・ 青年
 - 起業プログラム：（地元生産物とツアーガイドボランティア）2020年1～9月
 - ショートビデオ・コンペティション：（インフル

エンサー／ソーシャル・メディア上での拡散)

2020年3～4月

- 「ワリサン・キタ」コンサート：（コミュニティ・イベント）2020年8月
- ・ 生徒
 - ハイスクール・アタック（エデュテインメント（教育エンターテインメント）・プログラム）2020年1～4月
 - ジェジャック・レンゴン市民マラソン：（史跡の広報）2020年6月（第2週）～7月

期待される効果：

- ・ 世界遺産を守るための機会や支援を提供する。
- ・ 若手の起業家を育成するプラットフォームを構築する。
- ・ ペラ州における訪問先としてレンゴン峡谷を象徴的場所に確立する。
- ・ レンゴン渓谷を訪れるべき場所としてペラ州観光カレンダーに掲載する。

関係協力団体：

- ・ ペラ州観光芸術文化省
- ・ ペラ州情報局
- ・ レンゴン郡行政事務所
- ・ 村の首長
- ・ 国際ビフレンダーズ
- ・ レンゴン郡教育事務所
- ・ スルタン・アズラン・シャー国民中等学校
- ・ タン・スリ・アブドゥル・アジズ国民中等学校
- ・ ダト・アフマッド国民中等学校
- ・ レンゴン・ジュニア・サイエンス・カレッジ

F. ブルネイ

ブルネイPYは、地元の青年起業家とSSEAYPの世界中のメンバー両方に有益な青年起業プロジェクトを開始する。起業に関する知識とネットワークを得る機会にするために、ブルネイで実施する3日間のイベントに参加してもらう。

プロジェクト名：BRUNEI SSEAYPRENEUR FESTIVAL (ブルネイ・セアアップレナー・フェスティバル)

背景：

- ・ 質の高い教育や質の高い生活は、ダイナミックで持続可能な経済状況にある環境のもとに成り立つものである。このような環境は以下の状況に影響する。
 - 持続的な成長
 - 多様な経済
 - 失業率の低迷
 - マクロ経済の安定
- ・ スルタン（国王陛下）
 - 2018年第34回独立記念日におけるスルトンの演説
 - この国は、国内外のプログラムへの参加を通して自己形成の機会を得ながら、勇気を持ち国の発展

をリードしてくれる青年を必要としている。

- 青年は、国の発展に新しい影響をもたらす希望である。

目標：

- ・ 青年に起業の考え方をもたらす
- ・ SSEAYP既参加青年間で協力する
- ・ SSEAYPを広報する

対象：

- ・ 青年の起業を促進するための3日間フェスティバル
- ・ SSEAYP既参加青年の起業家や地元の青年起業家

内容：

- ・ 主なイベント
 - SSEAYP既参加青年の企業
 - 新規ビジネス
- ・ 教育
 - 財務ノウハウや新規立ち上げなど起業に関するワークショップ
 - 成功している起業家との対話セッション
- ・ エンターテインメント
 - 社会課題を広報する映像や写真のコンテスト
 - 様々なアドボカシーを紹介するパフォーマンス
 - SSEAYPを紹介する参加型の活動

主な評価指標：

- ・ 来場者数
 - 500名
- ・ 成功率
 - 来場者の60%がSSEAYPを知っている
 - 40%が起業に関心がある
- ・ 参加企業数
 - 30企業

効果測定ツール：

- ・ 質問票の配布
 - 来場者は会場入り口で質問票を受け取る
- ・ 質問票の回収
 - 来場者はフェスティバルの終わりに質問票を提出する
- ・ イベントの評価
 - 質問票の回答をもとに評価する

タイムライン：

- ・ 2019年12月～2020年1月：企画とリサーチ
- ・ 2020年2～3月：スポンサー探しと資金調達
- ・ 2020年4～5月：マーケティング活動、宣伝広報
- ・ 2020年6月：セアアップレナー・フェスティバル実施

発展と継続可能性：

- ・ セアアップレナー・ミニフェスティバル
- ・ ブルネイ+2セアアップレナー・フェスティバル
- ・ 日本ASEANセアアップレナー・フェスティバル

G. カンボジア

地方に居住している又は障害と共に生きるカンボジアの生徒は、支援や資源不足、自尊心の低さのため、学業成績が悪くなりがちである。この課題を解決するため、カンボジアPYは、様々な活動を通して現地の生徒のスキルや生活を向上するために、メンター・プログラムを提供する。

プロジェクト名：フューチャー・ディスカバリー・デイ
背景：

- 問題分析
 - 10～12年生の生徒は自身の将来を自身で選ぶことができない。
 - 限られた資源、経験、選択肢
 - 支援や指導の不足
 - 自信のなさ目標設定スキルの低さ
- 課題の概要：
 - 入学率（UNICEF 2017年）
 - 小学校：97.8%
 - 中学校：89.85%
 - 高等学校：13.13%
 - 中退率
 - 2倍：地方農村部の生徒は都市部と比べて中退する傾向にある。（PIC 2017）
 - 4倍：恵まれない環境におかれた生徒は学習到達度調査の基準値を達成しにくい。（教育・青少年・スポーツ省2018年）

場所：

- 2019年9月：カンボット州
- 2020年1月：パンティメンチェイ州
- 2020年3月：コンボンスプー州

解決策：

- アイスブレイキング
- 刺激になる物語
- 適切な職業チェック
- 大学や職業カウンセリングブース
- 目標設定スキル学習の資源
- 学習資源

活動：メンター・プログラム

- 毎月の電話
- オンラインのチャット
- フェイスブック・グループ
- 学習の資源と機会
- 生徒の自主的な活動
- 要望に応じた支援

メンターの参加条件：

- 最低月に一度の電話：月に2～3時間
- 4か月の参加
- メンタリングする相手の進捗記録：月に1時間
- メンター研修・グループミーティングへの参加：月

に1時間

- フェイスブック・グループの学習データベースへの貢献：月に1時間

H. インドネシア

インドネシアPYは、社会的に疎外されたコミュニティにおいて国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）に対する関心を高めるための短期及び長期プロジェクトを実施する。まずPY全員でパイロットプロジェクトを一か所で実施し、その後、より多くの人に影響を与えられるように、全員が各自の州にプロジェクトを持ち帰り、実施する。

プロジェクト名：All of Us Matter Project（全ての人が大切プロジェクト）

目標：短期及び長期の事後活動を通して、社会に疎外されたコミュニティにてSDGsの関心を高めること

内容：

- 短期プロジェクト：
 - 場所：レンバガ・ブンビナアン・クスス・アナック・タンゲラン（少年更生施設）
 - テーマ「ポジティブ・セルフ・トーク」：参加者に、希望を持ち、人生の明るい側面を発見してもらうことを奨励するセッション。
 - SDGs：全ての人に健康と福祉を
 - 時期：2019年12月16日
 - 対象：疎外されたコミュニティ（14～18歳の拘留中の子供、参加者75～90名）
- 長期プロジェクト：
 - 場所：各PYの出身州28州（アチェ州から西パプア州まで）
 - テーマ：未確定
 - SDGs：全て
 - 時期：2020年1～9月
 - 対象：疎外されたコミュニティ（14～50歳、約560名）

タイムライン：

- 2019年12月：パイロットプロジェクトの実施
- 2020年1～3月：プロジェクト確定
- 2020年4～7月：プロジェクト実施
- 2020年8～9月：プロジェクト評価

I. ラオス

現在ラオスにおいて、廃棄物処理の課題が拡大しており、生徒の意識向上が課題解決の鍵になると考えられている。生徒の態度変容及びSSEAYPを広報するために学校を訪問し、廃棄物処理や減量化に関する活動を行う。
プロジェクト名：Big Share: Wide Thoughts（大きな共有：幅広い考え）

背景：

- ・ 一日当たりの廃棄物量：330トン（2015年）、600トン（2017年）
- ・ 廃棄物回収量：約40～60%（グローバルグリーン成長研究所）

目標：

- ・ 数か所の学校にて、ごみの影響に関する生徒の意識向上
- ・ 4 Rs（リデュース、リユース、リサイクル、リフューズ）を通して、廃棄物管理と減量化に対する意識向上
- ・ 生徒の態度変容
- ・ 生徒にSSEAYPを奨励

対象：

- ・ 12～18歳の生徒

内容：

1. SSEAYP紹介
2. 廃棄物の影響
3. 廃棄物処理のプロセス
4. 4 Rsの原則（映像、アクティビティ、Q & Aを含むプレナリーセッション）
5. 掃除用具の提供

タイムライン：

- ・ 2019年12月13～17日：企画案作成と予算案作成
- ・ 2019年12月16～17日：資材準備
- ・ 2019年18～20日：学校訪問
- ・ 2020年1月18日：プロジェクト評価
- ・ 2020年2月18日：フォローアップとプロジェクト促進

期待される効果：

- ・ 活動への参加や教師を巻き込むことで、生徒の廃棄物管理に関する理解が向上する
- ・ 生徒の思考が進展する
- ・ 学校の環境が改善する
- ・ 生徒がSSEAYPや社会貢献に関心を持つ

J. フィリピン

フィリピンの青年もしくは若いリーダーたちは、社会に関するビジョンを持っているにもかかわらず、行政との連絡が困難であるために、地方行政と彼らの構想を共有することが難しい。フィリピンPYは、そのような青年と行政の間を取り持つための新しいフレームワークを築くことを企画する。

プロジェクト名：ISIP SALITA GAWA（思考、言葉、行動）

対象とする関係者：

- ・ 青少年リーダー
- ・ 地方行政管理職及び職員

内容：

- ・ 知識交換ワークショップ

- ・ コンティンジェントとしての活動
- ・ 17名の個人活動
- ・ 行政とのミーティング
 - ・ 戦略計画策定に知識交換ワークショップの結果を含める

タイムライン：

- ・ 2019年第4四半期：コンティンジェント全体での知識交換ワークショップ
- ・ 2020年第2四半期：17個人の知識交換ワークショップ
- ・ 2021年第2～4四半期：行政関係者とのミーティング

期待される効果：

- ・ 知識交換ワークショップ
- ・ 地方行政とのミーティング
- ・ 行政計画

K. タイ

タイPYは、コミュニティベースのプロジェクト「ひとつの学校にひとつの製品」を立ち上げる。本プロジェクトは、コミュニティに経済的効果を及ぼすために青年に起業家的発想を構築することを目的とする。起業家的発想を念頭においた実践スキル研修を提供する3日間のワークショップを含めた企画となっている。

プロジェクト名：One school, one product（一つの学校に一つの製品）

背景：

- ・ タイには豊かな資源や人材があるにもかかわらず、起業の知識が不足しており収入格差が大きい。

目的：

- ・ 地域コミュニティで若手の起業家を促進する

目標：

- ・ 若年層に起業家的発想を根付かせる
- ・ コミュニティに別の収入を創る

対象：

- ・ バンコク、クロートゥーイ・コミュニティの若年層（15～18歳）

内容：

- ・ 1日目（起業へのイントロダクション）
 - ・ インスピレーション・セッション
 - ・ 資金計画の基本
- ・ 2日目（ワークショップ）
 - ・ デザインの検討
 - ・ オンライン・マーケティング
- ・ 3日目（ワークショップ）
 - ・ 製品デザイン
 - ・ プレゼンテーション・スキル

期待される効果：

- ・ 青年全員が、プログラムに沿って、起業の基本知識を得る。
- ・ 青年の90%が、プレゼンテーション・スキルを身に

着ける。

- 青年は地域コミュニティに収入をもたらす製品を少なくとも一つ考え付く。

タイムライン：

- 2019年12月：
 - 調査／コミュニティ課題分析
 - 結果まとめ／資源／予算
- 2020年1月：
 - 起業カリキュラムの作成
 - 関係者との連絡
- 2020年2月：PPAプレゼンテーション
- 2020年2月28日～3月2日：PPA継続

持続可能性：

- 起業家的発想の習得
- 複製可能なモデルの構築
- 経済成長の高まり

(3) 個人事後活動提案

A. I am M.A.D. キャンプ

発表者：P-12、J-64、B-59

導入：

P-12が、ボランティア団体での継続したプログラムについて共有したところ、J-64とB-59はキャンプ活動を支援するために駆け付けけることにした。キャンプ参加後、それぞれの国にアイデアを持ち帰る予定である。

プロジェクト名：I am M.A.D. (Making A

Difference：変化を起こそう) キャンプ

目的：

- 学校児童が、キャンプ活動を通して熱意ある市民になるよう動機づける。
- 社会の無関心を軽減し、青年の社会参加を増加する。
- 他国のPYの参加により、国際ネットワークを拡大する。

内容：

- 「I am M.A.D. キャンプ」は、ボランティア（特に青年）が10～12歳の児童と関わり、愛を擁護する熱意ある市民になるようにするための3日間のアウトリーチ・プログラムである。
 - 環境への愛
 - 他人への愛
 - 神への愛
 - 国への愛

内容：

- この取組は、SDGs 4に当たる地球市民を促進するキャンプを通して、ASEANと日本の第46回 SSEAYP PYのつながりを継続することを目指す。
- 特に、以下を予定している。

- フィリピンを訪問してボランティア活動をする。
- その後、自国でキャンプを行う。現時点で、ブルネイ、シンガポール、日本にて予定している。
- 地球市民を促進するPYのネットワークを構築する。

B. PERIOD.

発表者：C-64、P-51

導入：

C-64は、自身が活動をしているエコフレンドリーな生理用品についてPYセミナーを行った。このセミナーに参加し感銘を受けたP-51は、この推進運動に貢献することを決め、自身の国でも同様の活動を予定している。

プロジェクト名：PERIOD. (ピリオド.)

背景：

- プラスチック製の生理用品の使用がネガティブな事実を引き起こしている。
 - インドでは1か月に4億3,200万の使い捨てナプキン
 - 生物分解されるまで500から800年以上
 - 隠れた化学物質
 - ナプキン1個＝レジ袋4枚分

目的：

- 人々に利点を情報提供する。
- 毎月の消費を軽減する。
- 女性の身体が化学処理した製品に暴露するのを軽減する、もしくは終わらせる。
- お金と資源を節約する。
- ASEAN各国と連携する。

目標：

- 全ての年齢の女性及び当運動の共有に関心のある全ての人

内容：

- 知識共有
- 地方のコミュニティや学校へ知識や布ナプキン、月経カップなどの代替品の提供

パートナーシップ協力：

- フィリピン政府国家青少年委員会
- SNS
- 地方行政
- 公立学校
- リーダーシップ研修とワークショップ

期待される効果：

- 人々の意識がより向上する。
- 人々が、この運動に参加する選択肢を得る。
- 日本やASEAN各国からパートナーを得る。
- 自身のコミュニティでもっとパートナーを得る。

タイムライン：

- 2020年4月：フィリピン東ミンドロ州の32バランガイ（最小の地方自治単位）と公立高校で活動する。
- 2020年末まで：リソース・スピーカーとしてPYを迎える。社会事業を扱うグループを作る。
- 2021年：フィリピンのミマロパ地方及び日本やASEAN各地で活動する。

C. ユース（YOUth）・ブレイキング・バイオレンス・プロジェクト

発表者：P-62、I-03、I-56

導入：

P-62は、ミンダナオで元戦闘員のための炊き出しプロジェクトを行っている。このプロジェクトに感銘を受け、I-03とI-56は、コミュニティの平和構築のため、プロジェクトをインドネシアのパプア地域に持ち帰る予定である。

プロジェクト名：ユース（YOUth）・ブレイキング・バイオレンス・プロジェクト

背景：

- 平和のために、暴力過激主義に反対するプログラム

目的：

- 活発な市民になり、コミュニティの平和のための人員に

なるよう、暴力に関わっている若者の考え方を変える。

- ASEANと日本で平和構築に関わる青年を増やす。
- 暴力に関与する青年の数を減らす。

対象：

- 元戦闘員（12～30歳）
- 学校に行っていない青年

目標：

- SSEAYPを通して暴力のサイクルを断つためのフィリピンとインドネシアのプラットフォームを設立する。
 - 平和教育のアイデア交換のためのプラットフォーム構築（フェイスブック・ページ）
 - 定期的なオンライン会議
 - パートナーやボランティアの誘い
 - ネットワークとアライアンスのマッピング

コミュニティ活動：

- 教育
- スキル・トレーニング、能力構築
- 生活

期待される効果：

- 元戦闘員はコミュニティにおいて活動的で生産的である
- 暴力に関与する青年の数の軽減

タイムライン：

2019年：事前実施

2020～2024年：実施

2021～2024年：事後実施